

ヴェルサイユ平和會議とロシア問題

細谷 千博

一 はしがき

革命ロシアを、一次大戦の講和体制から除外したことは、ヴェルサイユ体制の崩壊に作用した重要な因子のひとつとされる。大戦後の世界政治における、革命ロシアと旧連合諸国との不安定な関係は、やがてファシズム勢力擡頭のための格好の間隙を提供する。またアメリカとソヴィエト・ロシア、この二つの大国を欠いた国際連盟は、国際平和維持に不可欠の力と權威におととり、やがて機能不全を露呈する。ヴェルサイユ平和會議で、《ロシア問題》が適切な処理をなされたか、否かは、その後の国際政治の針路に測りえない影響をもたらしたのである。

この意義は、會議にのぞんだ連合指導者によって決して看過されてはいなかった。真の世界平和が、《ロシア問題》の正しい解決なしに世界にもたらされないことは、充分その認識するところであった。

「われわれが、平和會議の幕を閉じバリを去るにあたって、ヨーロッパとアジアの半分が、いぜん戦いの焰の中にあるのを見るならば、われわれはすぐれた世界を建設したと、慶賀し合うわけにはゆかないであろう。」

と、会議開幕を前にして語った、イギリス首相ロイド・ジョージ Lloyd George, David の言葉は、この認識を代表するものであった。

ところで、『ロシア問題』の解決は、世界平和実現にとつての不可欠の一環であるとする理解と同時に、連合国指導者の間には、『ロシア問題』を「ポリシェヴィズムの脅威」と等置して、もっぱらこの観点から、その解決策を講じようとした有力な見解が存在していたこと、またヴェルサイユ会議での『ロシア問題』へのアプローチが、次第にこの角度に傾斜していったことに注意されねばならない。

たとえば、イギリスの陸相チャーチル Churchill, Winston が、

「ロシアは、全局面の鍵である。ロシアがヨーロッパの生きた一部分とならないかぎり、……ヨーロッパには平和も、勝利も存在しないであろう。」

というとき、彼はもっぱら「ポリシェヴィズムの脅威」との関連で発言していたのである。『ロシア問題』をこのような視角からとらえ、またその意味での『ロシア問題』の解決を、ドイツ問題の処理以上に重視した、アメリカの国務長官ランシング Lansing, Robert は、ドイツ敗北直後、友人宛の手紙でのべている。

「……賠償とか、公正な報復とか、そういった種類のことは、私の念頭にない。私の関心事はもっぱら、ポリシェヴィズム——社会の構造そのものを脅かす危険——を、いかにして防止しうるかという問題である。」⁽³⁾

この意義でとらえられた『ロシア問題』は、パリ会議の多くの局面に、微妙な影響をもたらさずにはいなかった。まことにベーカー Baker, Ray S. も、いうように、「ロシアは、パリでプロシアより一層重要な役割を担当した。プロ

シアの思想は、完全に粉碎されたが、ロシアの思想は、勃興しつつあった」のである。⁽⁴⁾

このような意義をになった。《ロシア問題》を、パリに参集した連合国政府指導者は、どのような形で解決を試みたのであろうか、この点を検討するのが、本稿の目的である。彼らによって試みられたいくつかの解決策のうち、ここではとくに、ソヴィエト政権を直接対象として、連合国政府、とくにアメリカ政府が行った外交措置を中心に考察がなされる。したがって、バクラー・リトヴィノフ会談、プリンキポ島会議の提唱、ブリット・ミッシェンのモスコイ派遣、ナンセン救済委員会、の四つの問題がとり上げられ、アメリカ外交政策の基本目標との関連において、それらの内容と基本的性格の統一的把握が意図される。これらの問題は、「二つの世界」への分極化の歴史の上で重要な位置を占めているにもかかわらず、従来比較的に歴史的分析の対象とされることが少なかったのである。⁽⁵⁾

このように、アメリカ政府の対ソ政策という観点から、問題はとり上げられるが、ここで、パリのアメリカ全権委員団内部における政策の形成過程をできるだけ仔細に追跡することが意図される。当然、最高の政策決定者としてのウィルソン Wilson, Woodrow の行動を中心に考察がなされる。それは、ウィルソンが、大統領としてアメリカ全権委員団を統率していたにもかかわらず、全権委員とウィルソンとの間ではコミュニケーションが欠如し、相互の孤立から全権委員団は「政策決定単位」としての機能を麻痺せしめていたからである。⁽⁶⁾ 例外はウィルソンとハウス House, Edward M. の関係であったが、これとても会議の後半期になると、コミュニケーションは断絶し、⁽⁷⁾ ハウスは政策決定過程から除外される。

なお、本稿で使用した根本資料はすべてアメリカのものであり、主要なものは、Wilson Papers, Lansing Papers,

Bliss Papers, McCormick Papers,——以上「ロシヤの国会図書館」——Department of States Papers——
ナンソンの国立図書館記録保管所 (National Archives) ——House Papers, Folk Papers, Bullitt Papers, Auchincloss
Papers, Buckler Papers, Wiseman Papers,——以上「イェール大学図書館」による。

- (1) 一九一九年一月一六日の一〇人会議 Council of Ten における発言。United States, Department of State, Papers
Relating to the Foreign Relations of the United States, (以下「U. S. Foreign Relations 文庫」) 1919, Russia, 1937,
p. 13.
- (2) 一九一九年二月一五日の一〇人会議における発言。Ibid, p. 62.
- (3) 一九一八年一月一四日「ランシングからハンカーフォード、R. S. 宛」書翰。Lansing Papers (Library
of Congress), Vol. 40.
- (4) Baker, Ray S., Woodrow Wilson and World Settlement, 1923, II, 64.
- (5) これらの問題にかんする公刊された根本資料として最も重要なのは「U. S. Foreign Relations 1919, Russia, 1937.」
である。これ以前の時期の書物は多く「ブルिट Bullitt, William の上院外交委員会で行った証言 (一九一九年九月一二日)
The Bullitt Mission to Russia, Testimony before the Committee on Foreign Relations of the United States Senate,
1919.」に依拠して、これらの問題の叙述を行つた。なお「ヴェルサイユ会議におけるロシア問題」をテーマとした「キング
ランド」は「ソヴェートの学者」シタインによるものがある。Stein, B. E., Die «russische Frage» auf der Pariser
Friedenskonferenz, 1919—1920, 1953. (原書は「一九四九年」モスコワで刊行)。
- (6) 五人の全権委員のひとりホワイト White, Henry はしるしている。「自分も、他の代表たちも、多くの場合、会議で何が

行われているか知らされなかった。このため、ティーム・ワークもえられず、大統領に有益な援助をあたえることも不可能で『た』。George, Alexander L. & Juliette L., Woodrow Wilson and Colonel House, 1956, pp. 216—218, 221—222. また他の全権委員ブリス Bliss, Trusker H. は、会議の全期間中、ウイルソンと公的以外の場所では話しあえたのは、わずか五回であつたと『いわれている。Palmer, Frederick, Bliss: Peacemaker, 1934, p. 363. とくに三月下旬から、四人会議 Council of Four で重要な問題が審議されるようになると、全権委員における情報の欠如は、一層甚だしくなる。ランシングの四月三日の卓上日記は、『この事態に対する全権委員の非常な不満をこぼしている。Lansing Papers, Desk Diary, April 3, 1919. ブリスも、この日、バーカー Baker, Newton D. 陸軍長官に、『会議が目下どのように進行しているのか、これを知ることが非常に困難である。……大統領に会うことは滅多にないし、意見の具申をしたり、助言をしたりする機会は殆んどない』と、手紙でその不満を吐露している。Bliss Papers (Library of Congress), Box 75, No. 51

(7) 大統領は、重要な問題の決定にあたって、多くの場合ハウスの意見を求めている。したがって、他の委員は、ハウスを媒介に会議の情報を入手することを試みた。例えば、ホワイトの場合。House Papers (Yale University Library), Diary, March, 28, 1919. そのハウスマ、ウイルソンとの関係が悪化した四月中旬以降、大統領とのコミュニケーションが断絶し会議の情報源としても、ばらイギリスのワイスマン Wiseman, Sir William にたよる有様であつた。Lansing Papers, Desk Diary, Apr. 25, 1919. なお、ウイマンとハウスマとの不和については、George, op. cit., Chapter XIII 参照。

二 バクラー・リトヴィノフ会談

一九一八年十一月、ドイツ帝国が革命に崩壊し、連合国との武力闘争に終止符をうった事態の進展は、世界革命を

基本目的とするソヴィエト指導者にとって、二つの意義で理解された。第一は、革命に対するブラスの意義である。ドイツの敗戦と、ドイツ帝国主義の没落は、ソヴィエト権力の存立を脅かす西方の重圧を解消した。しかも重圧がとり除かれたのみならず、革命の西方への進路を扼した障害も撤去されたかに見えた。そこでただちに、ソヴィエト指導者は、ブレスト・リトウスク Brest-Litovsk 条約を破棄し、バルチック地域からウクライナにいたるドイツ軍占領地域の回復と、ソヴィエト権力の樹立を開始する。

さらにソヴィエト指導者によって重要な意義を付されたのは、ドイツ革命の勃発である。それは世界革命戦列における「同盟軍」の出現として理解され、世界革命への闘争態勢は強化され、世界革命発展のテンポは著しく早まったとみなされたことである。この意義において、客観情勢はきわめて有利であり、「われわれが現在ほど国際的革命に近づいたことは一度もなかった」と、判断された。⁽¹⁾そしてロシア国境を越えての革命軍の進撃と、ドイツの同盟軍との直接連絡が企図される。

第二は革命に対するマイナスの意義である。ドイツの敗戦は西欧資本主義諸国をして対独戦争から解放されたエネルギーを、ソヴィエト権力に対する武力干渉の面へ転用することを可能にするものであった。この点に対する懸念は、レーニン Lenin, V. I. によって、「世界資本主義は、今こそわれわれに向って攻撃をはじめであろう」との警告として表明される。⁽²⁾

客観情勢のこのような分析にもとづき、ソヴィエトの指導者が、その基本目標の達成をはかるため、ストラテジーとして選択したのは、次の方法であった。

第一に、ドイツに対しては、そこに拠点を確保した「革命同盟軍」を支援し、両国の革命勢力の連携の緊密化をはかることである。このための具体的手段として、ドイツ革命の報道に接したソヴィエト指導者は、ドイツに対する使節団の派遣と食糧の寄贈を考慮する。全露ソヴィエト中央執行委員会は、ドイツの新政権樹立に祝賀と歓迎の意を表すべく、ブハーリン Bukharin, Nikolai, ヨッフケ、Joffe, Adolf, ラコフスキー Rakovsky, K. I., イグナトフ Ignatov, E. I., ラデック Radek, Kari からなる使節団をベルリンに派遣することを決定する。一方、ソヴィエト政府は、ドイツ労働者の飢餓状態への同情の表現として、貨車二台分の穀物提供をドイツ新政府に申し入れたのである。⁽³⁾

第二に、大戦に勝利をおさめた資本主義国に対しては、いわば「低姿勢」のストラテジーを採用する。それは、「世界資本主義」との対立・摩擦を回避し、それに全面的攻勢を開始するきっかけを与えないことであった。すなわち、死活にかかわらない事柄について、ある程度の犠牲を甘受することによって、「世界資本主義」の攻勢の機勢をそぎ、かくて獲得した「息ぬき」breathing spell を利用して、国内政治体制の強化と、世界革命への時を稼ぐというストラテジーであった。レーニンによって主唱されたこのストラテジーは、ソヴィエト政府の連合国政府に対する協調的態度、またいわゆる「平和攻勢」の政策として具現する。

すでに一九一八年一〇月、ソヴィエト政府は、平和回復と国交正常化を中心に、連合国政府と交渉に入りたい意向を中立国外交使節を仲介に表明するが、⁽⁴⁾ドイツ降伏の事態に即応して、「平和攻勢」は一層強力に、形態を新たにして展開されることとなる。すなわち、「世界資本主義」の関心をそそるべく、平和へのアピールは、ツァー政府の債務の承認、利権の提供を新たな譲歩として、連合国政府の前に提示する一方、連合国政府の代表との直接的接触への準備

として、その外交代表を中立国に派遣する。一二月月初旬、ソヴェエト政府が、前の駐英外交代表（非公公式）、リトヴィノフ Livinov, Maxim をストックホルムに派遣したのは、この目的のために他ならない。⁽⁵⁾

ストックホルムに到着したリトヴィノフは、「平和攻勢」実施の機会を注視する一方、西欧側との交友関係にもとづいて、外交的接触の可能性について打診をはじめ⁽⁶⁾。機会は、ウィルソンのロンドン訪問によって到来した。

リトヴィノフは、クリスマスの前日、ウィルソンにあてた書翰の形式で新しい平和提議を行う。それは宣伝的効果をはなれた、全体の調子の穏健さと、意図の真摯なひびきにおいて、従来の平和提議とは性質を異にするものであり、⁽⁷⁾ウィルソンの黙殺を許さない内容をそなえていた。

「……あなたはヨーロッパ問題の解決を可能ならしめる基盤として、諸原則を公にされ、またその解決を、正義と人道の要求に合致させる意図のあること、またそのために努力すること、を主張しているが、あなたの平和プログラムの多くの点は、わが国を今や支配するロシアの労働者と農民の一層広汎な要望のうちに包含されている。この点にかんがみて、このステートメントをあなたに送ることを許して頂きたい。

自決の権利をはじめて宣言し、また実際に各民族にあたえたのはロシアの労働者と農民である。さらに、帝国主義と軍国主義に対する内外の闘争で、犠牲の多くを強いられ、また秘密外交に決定的、かつ、痛烈な打撃をあたえたのも、またロシアの労働者と農民に他ならない。……

ソヴェエトの主要な目的は、ロシア国民の多数をしめる貧苦のひとびとのために、経済的自由を獲得することにある。この自由なしには、彼らにとって政治的自由は何の役にもたえない。……

……国の内外の戦闘の継続がもたらす、ロシア国土の一層の荒廃を回避したいと願っているロシアの労働者と農民は、譲歩によって、社会建設計画を平和に遂行できる条件を獲得できるならば、いかなる譲歩にも応ずる用意をもっている。

ロシアと西欧諸国との関係については、二つの道が開かれていると考えられる。

第一は、公然または偽装された形の干渉の継続である。……

第二は、……ソヴィエト政府との協定に到達し、外国軍隊をロシア領土から撤退させ、経済封鎖を中止し、物資の供給源をロシアの手にもどすことを助け、食料や原料資源の欠亡に悩むすべての国家の利益となるように、ロシアの天然の富を最も有効に開発する方式にかんし、技術上の助言をあたえることである。

労働者と生産者による独裁は、それ自体目的ではなく、すべての市民が、かつて属した階級にかかわらず、有用な仕事と平等な権利をあたえられる、新しい社会組織を建設するための手段である。……

あえて、あなたの正義感と公平な判断に訴えたい。

ことに何らか具体的措置を決定する前に、*cautivatur et altera pars*（他方の側も聴かざるべきなり）の要請に、正當な耳をかされんことを希望し、かつ信ずるものである。」（傍点は筆者）

(1) 一〇月革命一周年の翌日、第六回ソヴィエト大会におけるレーニンの演説。タニン著、広岡光治、大竹博吉共訳、ソヴェト外交十年史、昭和四年、七九—八〇頁。

(2) チェルシンへのレーニンの言葉。Fischer, Louis, *The Soviets in World Affairs*, 1930, I, 150. なぎ、レーニンは、

前掲の演説中で、「しかし、もしわれわれが現在ほど國際的革命に近づいたことは一度もなかったとすれば、またわれわれの立場が現在ほど危険に瀕していることも、今までにかつてなかったといえる」とのべた。前掲書、前掲頁。

(3) Carr, E. H., *German-Soviet Relations between the Two World Wars, 1919—1939*, 1951, pp. 3—4.

(4) 一〇月二四日、チチェリンはソイルソンに平和に近づいてのメッセージを送る。Degras, Jane, *Soviet Documents on Foreign Policy, 1951*, I, 112—120. それはラヂンクとチチェリンとの合作になるものとされ、「純然たる革命的宣伝と巧妙な外交との結合」と評価されるが、Fischer, op. cit., pp. 147—150. 真剣にアメリカ政府との協調を求めたというには、言い廻しは皮肉にすぎ、宣伝臭が露骨に出ている。一〇月二九日、ソヴェト政府は、ノルウェー公使に、「アメリカ政府と正常関係をもつための交渉を仲介するよう依頼し、U. S., *Foreign Relations, 1918*, Supp. 1, I, 448—455. 十一月三日には、ソヴェト政府はさらにモスコの全中立国代表を招請、休戦交渉への希望伝達を依頼する。Ibid., p. 471. また、十一月八日、第六回全露ソヴェト会議は、「連合国政府と」講和締結の交渉を開始する」ことを中央執行委員会に指示した。Ibid., p. 484; Degras, op. cit., p. 123.

(5) Fischer, op. cit., p. 156.

(6) リトヴィノフは、一二月三日、ランサム Ranthom, Arthur (ロンドン、デイリー・ニュース特派員)との会見で、旧政府債務の支払いと経済利権提供について、ソヴェト政府の譲歩を示唆し、連合国政府の反応をうかがった。Ibid.

(7) リトヴィノフの平和スピーチは、「言葉遣いの柔かさと情に訴えかける調子において、また世界革命の目標について言及することを一切控えている点において、二月前の、チチェリンの皮肉に満ちたノート、さらには一九一七年一月八日の、一番最初の平和布告とも際立った対照をなした」と、カーはしるしている。Carr, E. H., *The Bolshevik Revolution, 1917—1923*, III, 109.

(60) Degras, op. cit., pp. 129-132. なお、リトヴィノフ書翰の原物は、ウィルソン文書中に見出される。Wilson Papers, Series VIII-A, Box 5.

リトヴィノフの平和アピールは、二月二六日朝、まことにタイムリーに、ロンドンのアメリカ大使館に伝達された。⁽¹⁾それは道々に溢れる二〇〇万の群衆の歓呼する“*We Want Wilson*”の声をあびながら、ウィルソンが、ロンドン市中を凱旋行進した当日のことであった。⁽²⁾その晩、ウィルソンを迎えてバックingham宮殿で催された王室晩餐会は、絢爛豪華、目もくらむばかりであった。その光景は、ロイド・ジョージ Lloyd George, David 英首相をして生涯接しることがないと回顧せしめている。⁽³⁾これよりさきフランス人が、「救世主」ウィルソンに示した歓迎はさらに熱狂的であり、ひとをして「この地上で、ひとりの人間がその同朋からかほどの尊敬をかちえたことがあったらうか」と嘆息せしめるほどであった。⁽⁴⁾シャン・ゼリゼを埋めた二〇〇万の群衆は、「正義なる人ウィルソン」を讃えるに、⁽⁵⁾歓呼と、花環と、祈りと、涙とをもってしたといわれている。

ウィルソンの自負心はこの上ない満足を感じ、平和とデモクラシーの福音を人類の上にもたらすべき、その使命感は天空高く羽ばたいたことであろう。⁽⁶⁾リトヴィノフ書翰は、この生涯最良のときを経験していた大統領の手もとにとどけられたのである。しかもその文言は周到であり、ウィルソンの心理的反撥をさけて、正義の感覚にうったえるべく用意されていた。平和とデモクラシーの福音をロシア国民にも均霑させることの重要さをウィルソンはあらためて認識したに違いない。ことに *audiat et altera pars* は、ウィルソンにとって看過しえぬ一句であった。

ウィルソンのロンドン到着の翌日、米英の両政府首脳は、バルフォア Balfour, Arthur J. 英外相を交えて、来る

べき平和会議について意見を交換する。当然、会議へのロシア代表問題がとり上げられるが、ここでウィルソンは、リトヴィノフの提議に触れ、その真意を探ることを提案する。⁽⁷⁾ロイド・ジョージの同意をえたウィルソンは、つづいて彼の構想をハウスの検討に委ね、その支持をえた。ハウスの、一九一九年一月一日の日記は、「現在のソヴィエト政府の代表の、いわんとするところを聞くために、バクララーのコベンハーゲン派遣に、われわれは同意した」と、しるす。⁽⁸⁾バクララー Buckler, William H. は、アメリカのロンドン大使館づき特別補佐官である。

バクララーのストックホルム派遣についての正式の指示が、大統領から、國務長官ランシングにあたえられるのは、一月一〇日のことである。大統領は、その際、バクララー派遣の目的は、「ポリシェヴィキの心の内部を探ることにあり」と、彼の意図を説明した。⁽⁹⁾

ところで、興味あることは、大統領から國務長官への指示に先だって、すでに一月八日、ハウスは、アメリカ代表部のハリソン Harrison, I. を介して、ロンドン大使館に、バクララーのストックホルム行を命じ、その行動は、「数日前の彼のバリ訪問の際にあたえた訓令にしたがう」べきことを告げていることである。⁽¹⁰⁾訓令の内容は知られていない。が、それが、リトヴィノフ書簡が漠然と示唆しているソヴィエト政府の譲歩について、その程度と内容を探ることにあったことは、やがて明らかにされる。

バクララー派遣の決定において、國務省の反対意思は、まったく無視されていた。ワシントンのポーク Polk, Frank 「國務長官代理は、國務省を代表して、ポリシェヴィキとの接触には一貫して消極的態度を示していた。一月四日、来訪したイギリスの駐米代理大使バークレイ Barclay Colville が、リトヴィノフの平和提議に応じて、イギリス政

府はポリシェヴィキと外交的接觸の用意のあることをのべたのに対し、ポークは、自国の大統領がこの問題のイニシ
アティブをとっているとは、つゆとも知らず、イギリスの方針に反対の意向を表明する⁽¹¹⁾。

(1) 平和アビールの内容は、二月二六日午前九時、ストックホルムからロンドンのアメリカ大使館に着電したことが記録さ
れつゝる。

(2) New York Times, Dec. 27, 1918.

(3) Lloyd George, David, *The Truth about the Peace Treaties*, 1938, pp. 180—181.

(4) George, op. cit., pp. 211—212.

(5) *Ibid.*, p. 212.

(6) 「ウィルソンは、憐むべきヨーロッパの異教徒を、多年に亘る強暴な邪神への信仰から救済することをその仕事とする伝
道者をもつて、自ら任じていた。」Lloyd George, op. cit., p. 223. 牧師の家庭に育ち、善への意欲を強く植えつけられた
ウィルソンが、使徒的熱情をもつて、平和とデモクラシーの福音を戦後の世界にもたらそうとした。しかも彼にとって、デモ
クラシーはアメリカ・デモクラシーに他ならず、「アメリカ的制度を全世界に適用しようとする夢をもっていた」のである。
Baker, op. cit., II, 63. またウィルソンにとって、自負心の満足が、その政治的行動の重要な心理的契機であり、George, op.
cit., *passim*. その異常なまでに強つた自負心の満足欲は、彼の少年時代の父親への隸属関係に、根源をもつものとされる。
George, op. cit. *passim*.

(7) Lloyd George, op. cit., p. 189.

(8) House Papers, Diary, Jan. 1, 1919.

- (9) Wilson Papers, Series VIII—A, Box 9.
- (10) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, p. 4.
- (11) ボークは、一九一九年、一月四日の日記に「パークレイ来訪。ポリシェヴィキ政府の行った平和提議を話題とする。イギリス政府は、この問題について、わが政府の態度を知らんと欲している。イギリス政府は、ポリシェヴィキに、その提議の意味するところを訊ねる意向のようである。そこで私は、その誤れる所以を説明した。ロシアと何らか話し合いをする前に、対ソ政策の基本方針をまずバリで決めるべきである。イギリス政府のやり方は、ポリシェヴィキを強化するだけで、好ましい目的を達しないであらう。」Polk Papers (Yale University Library), Diary, Jan. 4, 1919.

かくしてウィルソンとハウスの合意のもとに、ストックホルムに派遣されたバクラは、一月一四日から三日間、リトヴィノフと会談する。会談の最終日には、イギリスの新聞、デイリー・ニュース Daily News の特派員ランサム Ransome, Arthur もこれに参加した。

この会談で、リトヴィノフは、ソヴェト政府が連合国政府との協調関係の基礎として、次の点で譲歩の意向をもつことを明らかにした。

- (1) 旧政府債務と外国権益の承認
- (2) 連合国内部におけるポリシェヴィズムの宣伝中止
- (3) 政府反対派に対する恩赦
- (4) ポーランド、フィンランド、ウクライナに対する領土的野心の否定。これらに自決の権利を完全にあたえる用

意のあること。ただし外国政府が、これら地域の資本家階級を援助する場合は、ソヴェエト政府は、当然労働者階級を援助すること

(5) 技術的協力関係の設定

リトヴィノフは、さらにこの会談でソヴェエト政府は、一層広汎な協定に応ずる用意があること、しかしその場合にはまず「連合国の要求のリストが提出される」必要のあることをのべた。最後に彼は、「ソヴェエト政府は決して少数者の、力による独裁政体ではない実体を、連合国が調査する」よう要望して、会見は終つて⁽¹⁾いる。

ところで、この会談の内容を伝えたバクラーの報告は、その中で、「ウラルその他の国境についての譲歩」を、バクラーがとり上げて、リトヴィノフの考慮を求めたことを、明らかにしている。⁽²⁾この点こそハウスが、バクラーにあたえた「訓令」と重要な関連をもつものではなかっただろうか。パー・ポリティクスの視座にたつハウスにおいて、「ロシア大帝国が、いくつかの国に解体する」ことは最も切望されていたところであつた。⁽³⁾それゆえにまた、とくにハウス宛の電報において、バクラーは、「われわれが余りに大幅な削減をロシアの領土に加えることがなければ、対外債務と外国権益にかんして双方に利益な取引をなしうるであろう。しかしロシアが、シベリアと炭田と油田とを失ふことになれば、それに比例して債務にかんし与えられる条件も悪くなるう」⁽⁴⁾（傍点は筆者）と報告している。

最後にバクラー報告は、ソヴェエト政府への宥和の方針を支持して、注目すべき発言を行う。

「連合国が、次の点、すなわちソヴェエト政府が今やロシア国民を強く把握している点への確信と、これを条件づきで承認する意思、さらにブレスト・リトウスク的取引をする意図の否定と、寛大な取扱いの考慮、及び相

手からも同様な期待をもっていること——を大胆にのべるならば、かかる態度は結局双方の利益になるであろう。さしあたって、チチェリンやリトヴィノフといった穩健派を強化し、ソヴィエト運動を右傾化し、外国資本や外国産業の公平な取扱いを主張する人々を権力の座におくであろう」と。(傍点は筆者)

バクラーのこの見解は、多分にデイリイ・ニューウスのランサムの影響のもとに形成されたものであろう。ランサムは、レーニン派が連合国との協調政策を支持していること、そして連合国の対ソ友好政策は、メンシェヴィキと社会革命党を含む連立政権の成立に導くであろうと観測して、バクラーを通じて、その意見をウイルソンに伝えたのである。⁽⁶⁾

バクラー報告は、ウイルソンのプリンキポ島会議構想にとって、ひとつの重要な契機を形づくる。⁽⁷⁾

- (1) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 15—17. バクラー・リトヴィノフ会談の一層詳細な報告は、Lansing Papers, Vol. 41. 及び Buckler Papers (Yale University Library), B # 6.
- (2) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, p. 17.
- (3) 一九一八年一〇月二八日のハウスの日記はしるしている。「ロシアに強大な軍国が出現するとき、それは世界に対する脅威となるであろう。私の望みは、この大帝国が、いくつかの国々に分割されることにある」。House Papers, Diary, Oct. 28, 1918.
- (4) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 17—18.
- (5) Ibid.
- (6) Lansing Papers, vol. 41.

(7) バクラは、その妻への手紙の中で、「ロモンハーゲンから送った私の報告は、一〇人会議で大統領から読み上げられ、プリンキポ島招請は、その直接的結果であった」と、しるしている。Buckler Papers, B # 6.

三 プリンキポ島会議の提唱

平和会議を組織する過程において、連合国の指導者が逢着したひとつの難問は、ロシア代表にかんするものであった。大戦において連合国の一員として重要な役割を演じ、最大の戦争犠牲を払った国の代表なしに平和会議を進めることは、およそ不条理に見えた。しかし困難は、革命の結果、ロシアの内戦がいぜん続き、その国土は革命、反革命の複数の政権により事実上分割され、支配されていたことであつた。いずれの政権が、平和会議でロシアを代表すべきか、複数のロシアを認めて、それぞれの政権に代表権をあたえるべきか、問題はきわめて複雑であり、解決をめぐって、連合国の指導者間の対立は鋭く露呈したのである。

ポリシエヴィキへの憎悪の念が最もはげしく、反革命援助に最も積極的なフランス、イタリーの支配層においては、ポリシエヴィキとの接触は一切否定され、会議への出席にあたっては、サゾノフ Sazonov, Sergei D., ルヴォフ Lvov, George E. 公ら、バリ滞在中の反革命派の代表が考慮された。⁽¹⁾これに対し、イギリスのロイド・ジョージ首相においては、革命、反革命いずれの側の代表をもバリに招請して、主張を開陳させる機会をあたえるべしとする立場がとられた。⁽²⁾一九一八年二月三十一日の英帝国戦時閣議 Imperial War Cabinet は、カーゾン卿 Lord Curzon of Kedleston, チャーチルら、「干渉主義者」のとする反革命派支持の有力な主張を退けて、平和会議にのぞむべきイギリス政府

の公式の態度として首相の立場を承認したのである。⁽²⁾

この閣議決定にもとづき、一九一九年一月三日、イギリス政府は、他の連合国政府に、次の趣旨のメッセージを、革命、反革命両派に送ることを呼びかけた。——ロシア国内の戦闘停止を条件として、連合国政府は革命、反革命両派の代表とパリで、「恒久的解決の条件」について討議する用意がある。⁽⁴⁾——さらにロイド・ジョージは、一月六日の一〇人会議 Council of Ten の席上、連合国政府首脳の前に、「ロシアの各政府の代表に休戦を実現して、パリで会合するよう求める」彼のプランをあらためて提出した。⁽⁵⁾

(1) 一九一九年一月二日の一〇人会議におけるピション Pichon, Stephen 仏外相の発言。U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 4—5. なお、サゾノフは、一九一〇年—一六年、ツァー政府の外相。ルヴォフ公は、一九一七年三月—五月、臨時政府の首相。

(2) 一九一八年二月初めの連合国会議 Inter-Allied Conference で、ロイド・ジョージは、この立場を、初めて公にとるが、それは、ロシアの代表権を否定した、クレマンソーの主張と対立した。連合国会議におけるロシア代表権問題の討議については、Lloyd George, op. cit., pp. 320—323.

(3) この日の英帝国戦時閣議における討議の状況については、Ibid., pp. 324—330.

(4) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 2—3.

(5) Ibid., p. 13.

ロイド・ジョージの構想に、ワシントンの國務省は反対の意見であった。それは一月三日イギリス政府の提案に接した國務省が、これを「得策ならず」と却けたことによって示された。⁽¹⁾ しかも國務省は、なぜかこのイギリス政府の

メッセージをパリのアメリカ代表部に回送することを怠っている。⁽²⁾この國務省のサポータージュにかかわりなく、一〇人会議で、ロイド・ジョージの提案をきいたウィルソンは、ただちに彼を支持する。

「リスアニア、ポーランド、フィンランドその他へのポリシェヴィキの侵入がやむならば、パリに代表派遣を希望するグループのすべてに、その希望をみとめることが賢明である。⁽³⁾」

一方、ロイド・ジョージの提案を知ったフランス支配層は、激しくこれに反撥を見せた。フランスの「資本家階級は、パリ労働者、ことに職のない復員者の間にある強い不満の事実を思つて」、この提案に「驚愕し」、また「パリの右翼紙は、武器をもって起ち上り、下院の廊下は憤激で蜂をつついたような騒ぎとなつた」のである。⁽⁴⁾フランス支配層の抵抗に直面して、ポリシェヴィキ代表のパリ到着は事実上不可能とみなされた。そこで、この事態に、アメリカ全権委員団のランシング、ブリス Bliss, Tasker H. 將軍、ホワイト White, Henry は、ロイド・ジョージ案に代るものとして、特別委員会のロシアへの派遣案に検討を加えてゐる。⁽⁵⁾

ところで、ストックホルムからのバクラー報告がウィルソンのもとに到着するのは、この時点においてであつた。ウィルソンが、この報告に重要な意義を付したことは、一月二一日の一〇人会議の席上、これを各国代表に披露したことも知られる。⁽⁶⁾バクラー報告が告げたソヴェト指導者の譲歩的態度から、ウィルソンは、革命、反革命兩派の間にも協定成立の可能性があるものとしたことであろう。また連合国の政策いかんでは、ソヴェト政権の穩健化、ひいては連立政権出現の可能性があるとする観測は、おそらくウィルソンの注意を強く惹いたことであろう。ともかく、バクラー報告を読み上げた同じ二一日に、ウィルソンは、一〇人会議で次の提案をした。それは、ロシアの各政治グ

ループに呼びかけて、それらの代表と連合国の代表をして、「協定成立の基礎となるプログラムの作成をこころみる」ために、パリ以外の場所で会合せしめんとするものであった。ウィルソンの提案は議論の末、一〇人会議の承認するところとなり、その趣旨にそってロシアの革命、反革命の各政権に発すべき招請状をウィルソンが作成することとなる。⁽⁷⁾

招請状は、会議開催の目的が、「ロシアに平和と現在の動乱から脱出する機会をあたえ、……ロシア国民各層の希望をたしかめ、さらに可能ならば、ロシアがその目的を達成し、ロシア国民と他国民との円滑な協力関係を設定をもたらず、何らかの了解もしくは協定を実現する」点にあること、そして参加を受諾するロシアの各政治団体は、おそくとも二月一五日までにマルモラ海のプリンキポ *Principo* 島に代表を派遣すべきこと、を呼びかけたものであった。

ただし、——この点が重要であるが、——会議参加の前提条件として、「招請された団体間に休戦の成立していること、また、大戦発生当時のヨーロッパ・ロシアの国境外の人民と地域、フィンランド、及び平和会議の基礎にある一四条で自立が考慮されている人民と地域に対して派遣された、もしくは現に進撃中のすべての軍隊は撤収され、侵略的軍事行動は中止すること」が要求されていた。⁽⁸⁾ (傍点は筆者)

プリンキポ島会議を提唱したウィルソンの意図は、二つの点にあったと思われる。第一は、世界平和の一環としての「ロシアの平和」確立、またロシアにおける《民主》政体の樹立、——革命、反革命の両派の代表がひとつのテーブルを囲み、話し合うという《民主的手続き》を通じ、内乱終熄の方法を発見する。できれば、憲法議会 *Constituent Assembly* の召集、あるいは人民投票方式の採用により、《民主的》政権を組織する。このような漠然たる期待を会

議提唱の背景に見ることができらるであらう。⁽⁹⁾

第二は、より明確な意図であり、會議參加の条件として、戦闘行動の中止を要求することで、ポリシェヴィズムの膨脹活動を抑止しようとするものであった。パリ會議にのぞんだウイルソンにとって、民族自決の原則の擁護は、國際連盟の設立とともに、ひとの知ることく會議で実現すべき最も基本的な目標とされて⁽¹⁰⁾いた。そこで民族自決の原則にしたがってその独立が約束されている国々が、ポリシェヴィズム浸透の危険にさらされているとき、事態はウイルソンにとって放置をゆるさぬものに見えた。東欧諸国への援助を通じて、それらの強化をはかる一方、これら国々の障壁化の完成に必要な時、あるいはポリシェヴィズムを「封じこめる」に必要な時をかせぐため、ソヴェエト指導者をして、武力的行動の中止を約束せしめる、というのが、この提案の他の重要な狙いであつた。⁽¹¹⁾

この点に関連して、ソヴェエト権力の周辺地域における事態の進展を見ると、ウイルソンの提案の意図は、一層明白なものとなる。すなわち、ドイツ軍の降服、その占領地域からの撤退と同時にソヴェエト権力の拡大活動は開始するが、ウクライナ方面では、一月三日、赤軍はハルコフ Kharkov を占領し、さらに前進をつづけていた。北部では、一月五日、ラトヴィアの首府リガ Riga が、ラトヴィア共産党の支配するところとなり、赤軍はまた、エストニア、リスマニア、白ロシアで進撃をつづけ、ドイツのスパルタクス団との直接連絡の可能性も大きくなって⁽¹²⁾いた。一方、中欧の敗戦国内部の社会不安は次第に險悪化し、プロレタリア革命の気運は高まっていた。この情勢は、たしかに連合國指導者をして、「『ポリシェヴィズム化の』危険は切迫しており、迅速にこれに対処する」必要を強く意識せしめたのである。

(1) 一月三日、イギリス大使館から覚書を受けとったホーク國務長官代理は、「國務次官補のフィリップス Phillips W. に宛てたノートをしるしている。「戦闘行為を中止するよう、コルチャク、デニキンその他に要求することは、不利をもたらすであろう。」このホークのノートにもとづいて、國務省は、ロシアの各政權に休戦を申入れることには反対で、したがって休戦を条件に、各政權の代表をパリに派遣するよう彼らに呼びかけることを不得策とする旨の対英回答案を作成した(一月六日)。Department of State Papers, National Archives, 861.00/3643.

(2) ランシントン國務長官は、一月一日「Humanité」の記事を通じて、「初めてイギリス政府の申入れのあった事実を知り、早速、ホーク宛に、「提案をすでに國務省が受領しているのか、どうか、また回答がなされたのか、どうか、至急知らせるよう」打電してゐる。Wilson Papers, Series VIII—A, Box 9.

(3) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 13—14.

(4) Lloyd George, op. cit., pp. 353—354.

(5) Lansing Papers, Desk Diary, Jan. 18, 1919.

(6) U. S., Foreign Relations, 1919, Paris Peace Conference, III, 643—646.

(7) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 19—25.

(8) Ibid., pp. 30—31.

(9) ウィルソンのポリシェヴィキ革命觀の一面は、次の言葉から窺うことができるであろう。「ポリシェヴィズムは、その默的な面が、一般の厭惡の念を催さしめる一面、その背後に何か共感をよぶ見えざる力といったものがある。今日世界のいたるところにおいて、大特權階級——それは経済、政治の領域で、世界に支配力を及ぼしている——にたいする叛逆意識が存在している。この特權階級の支配を是正する方法についての私の見解は、絶えざる話し合いと、漸進的改革の過程である」(一月一

六日、一〇人会談。Ibid., pp. 13—14. ウィルソンは、一面において、ロシア国内政治体制の《民主化》への強い関心をもつとともに——それはやがて、《民主化》を条件とするコルチャク政権への援助強化の通牒（五月二六日）となつて最もよく表現されるが——、他面において、「革命権への尊重」という考え方をもち、それは、たとえば、「いかなる国民も、その望む性質の統治形態をもつ権利がある。彼らをもたんとする統治形態の性質につき、意見をのべたり、影響を与えたりすることは、われわれの関知するところではない。時には極めて野蛮な形態の政府をもつこともあろう。が、それもわれわれの手を出すことではない。ロシアに関しても、この原則はあてはまる……」（一九一九年、二月二八日、民主党全国委員会における演説）

Tunnally, Joseph, Woodrow Wilson as I Know Him, 1921, pp. 373—374. といつた言葉の中に表明される。このような基本的觀念の分裂の中から、ウィルソンの対ソ政策の不明確さは生れてくる。

(10) 民族自決の原理と国際連盟の設立は、パリ会議で実現すべき、ウィルソンのプログラムの核心的部分をなしていた。いずれも、アメリカ的政治原理の、ヨーロッパ政治、あるいは世界政治への投射として主張されたのである。Baker, op. cit., pp. 11—13.

(11) 前述したように、ウィルソンは、民族自決の原理、さらには革命権の尊重——ヴァージニア権利掌典 Virginia Bill of Rights の適用——をいうが、彼はまた「ある国の内部の出来事を阻止するために、これに保障を与えることはない。しかし外部からの侵略に対しては、これを保障する」ことを強調している。Tunnally, op. cit., p. 373. また、ウィルソンが、東欧で独立を約束された国々への援助に示した熱意は、たとえば、一月一〇日附「マサリック Masaryk, T. G. 宛の友情に満ちた書翰の中に窺うことができる。「私にできる方法で、あなた達の国のお役に立つことができれば、こんな嬉しいことはありません。私にどんな貢献、助言、また行動ができるか、どうぞ時折連絡して下さい。」 Wilson Papers, Series VIII—A, Box 9. プリンキボ会議の提唱は、ソヴェエトの学者シュタインによって、新しい形の干渉——ソヴェエトの周辺諸国の武装化と、こ

れを先鋒とする軍事干渉——を組織するための時を稼ぐ必要に発するものとして理解される。Stein, B. E., Die «russische Frage» auf der Pariser Friedenskonferenz, 1919—1920, 1953, S. 98. しかし、ウィルソンの場合、その革命観から知られるごとく、武力をもってソヴィエト権力を覆滅する方針は、その意図から違かった。

(12) 一月三日のランシングの卓上日記。Lansing Papers, Desk Diary, Jan. 3, 1919.

ところで、プリンキポ会議案をもって《ロシア問題》の解決をはかろうとしたアメリカ外交政策の決定過程において、ウィルソン以外の政府指導者は、その意見をこれに反映せしめてないように見える。⁽¹⁾ ウィルソンの行動に対して、ランシング國務長官は明らかに懐疑的態度をもっていた。⁽²⁾ さらにこの提議に際しては、ハウスすら大統領と政策検討の機会をもったと見るべき証跡がない。ハウスは、提案から具体的成果が生れる可能性を疑問視し、その上、ソヴィエト政府が代表派遣拒否の挙に出ることを予想していた。⁽³⁾ 國務省の反対態度はいうまでもなかった。⁽⁴⁾ アメリカ政府内の多数が、プリンキポ構想を白眼視したのみならず、その一部からは会議の具体化を阻止すべき工作がひそかに進められていたのである。⁽⁵⁾

さて、プリンキポ会議の賛否をめぐって、連合国内部の世論は対立し、保守、革新二つの陣營の色分けを明らかにした。⁽⁶⁾ 保守派は、プリンキポ案に反撥する。⁽⁷⁾ とくにフランス支配層の反撃はもっとも激しかった。ウィルソンの措置は、「危険な決定」、「不吉な妥協」として、フランスの保守系新聞によって強く攻撃されたのみならず、⁽⁸⁾ フランス政府は、反革命派に対して、招請拒否の工作をひそかに進めるのであった。⁽⁹⁾

(1) 一月二一日、すなわちウィルソンの提案が一〇人会議になされた当日、ランシングの卓上日記はしるしている。「適当地

に設けられる国際委員会にのぞんで、ロシアの各党派がそれぞれの言い分を主張するよう、彼らに訴えるアピールを、大統領が起草することに同意した。また翌二二日の午前には、ウィルソンのアピールが一〇人会議の検討をうけるが、この日の卓上日記は、「大統領により作成された、ロシアの各党派へのアピールに同意した」とする。 Lansing Papers, Desk Diary, Jan. 21, 22, 1919. これらが示すようにプリンキポ案は、アメリカ政府首脳間で充分時間をかけて検討された後に提出されたという性質のものではなかったのである。前に述べたように、この時期に、他の全権委員は、特別委員会のロシア派遣案を考慮していた。

(2) たとえば、一月二七日、ランシングからホーク宛書翰。U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, p. 35.

(3) ハウスは、「二月一五日の一〇人会議の席上、「プリンキポ案には賛成でなかった」旨、告ぐ。U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, p. 65. また一月二二日、ハウスは、「イギリスのワイズマン Wiseman, Sir William」に「会議からせらくほとんど何ものも生れないだろう」と話し合い、「ソヴィエトが代表派遣を拒絶するであろう」と「予想している。Wiseman Papers (Yale University Library), No. 29.

(4) 二月一日のホークからランシング宛の公信は、「会議への呼びかけは、ポリシェヴィキに反対しているすべての党派の士気を破壊することにならう」として、「コルチャク政権承認の考慮を求めている。U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 38—39.

(5) 「ストラウス Strauss, A., ホーキング McCormick Vance, ノーナー Hoover, Herbert」の「トランス入や『上命政治家グループ』と会合して」反対工作を述べた。Williams, W. A., American Russian Relations, 1781—1947, 1952, pp. 166—167.

(6) アメリカ新聞界の大勢は、プリンキポ案反対の論陣をはった。Ibid., p. 167. 労働界の「極めて保守的な」最高リーダー、

トランス・Gompers, Samuel が、案に反対態度をとったことは興味深い。White, W. A., *The Autobiography of William Allen White*, 1946, p. 563. トランスの革新派の新聞 (Humanité, Populaire) は、この案を歓迎する。Noble, George B., *Policies and Opinions at Paris*, p. 272. またこの時期には、「ソビエトを倒せ」「ウィルソン万歳」と叫びながら、パリーの町を赤旗を振りながら行進してゐるグループもあった。Baker, op. cit., II, 64.

(7) ボナ・ロー Bonar Law. バルファアライギリス代表もこの案に不満であり、とくに武力干渉政策を推進していたイギリス陸軍の首脳は憤激が大きかった。Callwell, C. E., *Field Marshal Sir Henry Wilson: His Life and Diaries*, II, 167.

(8) Noble, op. cit., p. 272.

(9) White, op. cit., p. 562; Williams, op. cit., p. 166.

プリンキポ会議の提唱に対するソヴィエト政府の回答は、⁽¹⁾ 連合国指導者の一部の期待を裏切り、二月四日、会議への参加に応諾の意思を明らかにした。

「ソヴィエト・ロシアの軍事的、国内的情勢が逐次改善されつつあるにもかかわらず、ソヴィエト政府は、休戦協定実現を切望するところから、この目的のためにただちに、交渉に入る用意がある。また繰りかえし声明しているごとく、ソヴィエト政府は、ソヴィエト・ロシアの将来の発展を危殆におとし入れないことを条件に、重要な譲与によるこんで応ずるものである。」(傍点は筆者)

そして譲与として、次の四点がしるされていた。

(1) 旧債の承認。連合国の個人債権者への支払い義務の承認

(2) 外国にクレディットを求める意図と、利子の支払に充当すべく原料資源の提供

(3) 外国私人に対する鉱山、森林その他の利権の提供

(4) プリンキポ会議において、領土割譲の審議に応ずる用意

さらにポリシニヴィズム宣伝の問題にかんして、内政不干渉の約定を締結する意向も示された。⁽²⁾ 回答全体のあたえる印象は、明らかに譲与の提供を代償に、連合国政府と話し合いの機会をもとうとする、ソヴィエト指導者の意欲を示すものであった。

領土割譲を含む大幅な譲歩を示した、このソヴィエト政府の回答が決定される過程において、ソヴィエトの最高指導者の内部における論議は激しく、回答案は、左派の強い批判をうけたものと推察される。⁽³⁾ レーニンは、三月一八日の第八回党大会への報告で、「この提議とわれわれの回答は、ブレスト平和のさい確立した帝国主義者にたいするわれわれの立場を、ある点で、しかもきわめて本質的な点で、あらためて表現したものである」と、その政策を説明した。⁽⁴⁾ レーニンのストラテジーが、ブレスト・リトウスク講和のさい、「息抜き」の獲得であったことは明らかである。と同時に、ソヴィエト外交が一貫して追求する帝国主義国家相互間の矛盾、及び帝国主義国家の内部的矛盾の利用、さらにその分裂の深化が、この回答案の決定に際しても考量されていたことはいまでもなかつた。チチェリン外務人民委員は、二月一〇日、中央執行委員会に、回答にかんして報告をする。

「われわれに對峙している陣営内部に二つの傾向がある。ひとつの傾向は和解に反対し、他はこれを支持する。

われわれの問題は、前者の傾向をして、後者に対して不利な立場に追いこむことである。……」⁽⁵⁾
 チェリンによって、アメリカは後者の陣営に属し、ウィルソンは、ソヴィエトへの和解的立場を代表するリーダーとみなされた。

「アメリカは、これらの国家のうちで、統一されたロシア経済組織を維持することに最も関心をもち、ロシアを弱体化することを利益としない。」⁽⁶⁾

プリンキボ案が、反革命派にもたらした衝撃は大きかった。その支配地域の労働者、農民、さらに前線の兵士は、会議開催に平和回復の希望を托した。⁽⁷⁾しかし反革命政権の支配層にとって、ポリシェヴィキと平等の立場で、和解の話し合いをすることは一顧だに値しなかった。彼らにおいて「祖国ロシアの再建」という旗幟に泥がつけられたという屈辱の念が大きかったばかりでなく、会議開催の展望があたえた、麾下の将士のおおむねない戦闘意欲の低下は、政権の維持にとって極めて危険な事態であった。⁽⁸⁾しかもプリンキボ案に対する彼らの反対態度は、パリ滞在の反革命派の代表を通路として伝えられてきた、フランス政府の意図によって、一層強固なものになった。そこで、ラトヴィア、エストニア、リビアニアの三政権を除き、主要な反革命政権は、プリンキボ会議への参加を拒否する。⁽⁹⁾コルチャク Koltchak, Admiral Alexander V., ニーキン Denikin, General Anton I., チャイコフスキー Chaikowski, N. V. の三政権は、二月二日、共同で、拒否の回答を發した。⁽¹⁰⁾

(1) ハウス(前述、一月二二日のワイズマンとの談話)、バルフォアらは、明らかに、ソヴィエト政府が、会議への招請を拒否するものと予想していた。一月二一日の一〇人会議で、バルフォアは発言して、ポリシェヴィキは、他の代表と平等の資格で

會議に参加するとは考えられず、招請の拒否によって、彼らは不利な立場におち入るであらうと予想した。U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, p. 22. この点をとり上げて、シユタインは、プリンキポ會議の招請は、干渉の口実をうるための臨策と解釈する。Stein, a. a. O. S. 98 またミンツは、「大衆の一般的平和気分を考慮して、平和の樹立者たる役割を買っているように見せているが、実際は會議を召集する意図はなく、その調停は、いふところの失敗の責任を、ソヴィエト・ロシアに転嫁しようとしてみるにすぎない」と、連合國の政策を説明する。Поремкин, В. П. (ред.), Истории Дипломатии, 1945, II, 60.

(2) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 39—42, Degras, op. cit., pp. 137—139.

(3) ジノヴィエフ Zinoviev, G は、一月二七日、ストログラード・ソヴィエトで、「たとえ羊の皮をつけて現われようとも、狼を信する勿れ」と演説をして、赤軍の進撃中止に絶対反対の意向を表明している。Dennis, A. L. P., The Foreign Policies of Soviet Russia 1924, pp. 78—79.

(4) Stein, a. a. O. S. 85—86. タニン、前掲書、一一九—一二〇頁。なお、ミンツは、この回答を、「帝國主義者グループの真の意図を暴露し、その仲裁者の仮面を引きはがすことを目的とするものであった」と、説明する。Поремкин, цит. соч., стр. 61.

(5) Dennis, op. cit., p. 79.

(6) Ibid.

(7) たとえば、イルクーツクからの情報は、同地区の意見は、プリンキポ提案をめぐって三つに分裂していることを伝えてゐる。ポリシエヴィキとの協定を望む労働者、農民はいうまでもなく、ポリシエヴィキと対立する社会革命党、その他においても、プリンキポ會議を内戦解決への第一歩として歓迎した（ハリス領事からランシング宛、三月八日）。Department of State

Papers, National Archives, 861.00/4062.

(8) たとえ²⁴ 一月三〇日「アルンケルのプール Poole, Dewitt C 米参事官からの報告」U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 37—38.

(9) Ibid., pp. 47—50, 52—53, 69, 72—73.

(10) Ibid., pp. 53—54.

四 ブリット・ミッションのモスコー派遣

反革命政権側の会議参加への拒否的回答は、プリンキポ構想の実現を不能にした。一方、ソヴェト政府の回答も、会議参加の意思を明示はしたものの、参加の前提要件である武力行動の中止については、態度を明確にせず、それは連合国の指導者にとって、必ずしも招請状に対する「受諾」とはみなしえないものであった。その上、回答は、物質的利益の提供による「世界資本主義」との取引に重点をおいて作成されており、会議の発案者にとって、本来の意図を歪めて解釈した、「侮辱的調子」に満ちたものに見えた。「この侮辱を見のがすわけにはゆかない。金銭や利権や領土が、われわれの目当てではない。われわれは彼らの友達であり、援助の手をさしのべたいだけなのだ」と、回答に接したロイド・ジョージは、その憤激を口にした。⁽¹⁾

ところで、この事態に直面した連合国指導者の間では、採るべき次の政策にかんして、二つの考え方が対立する。すなわち、第一は、「干渉主義者」の支持するものであり、この際、宥和政策を一擲、経済封鎖、さらに武力干渉をも

って、積極的にポリシエヴィキ政權の打倒をはかるべしとするものであった。第二のものは、武力行動の停止について、あらためてソヴィエト政府の真意をたしかめようとするものであり、休戦の實行ある場合には、反革命派を除外してポリシエヴィキのみとの会談をもち、一般協定締結のために話し合いをすることも可とするものであった。ただこの場合、休戦協定の實現を通じて、ポリシエヴィズムの「封じこめ」を図ることに力点をおく立場と、ポリシエヴィキとの「話し合い」を通じて、正常な国交回復を図ることに力点をおく立場があつたことは注意されねばならない。

第一の積極干渉の立場は、とくにフランス、イギリスの軍部により強く推進され、フランス、イタリーの政府指導者もこれに属して⁽²⁾いた。第二の立場のうち、協定を通じてする「封じこめ」に力点をおくものは、アメリカ、イギリスの政府指導者の多くによってとられていたものであつた。

さて、対ソ武力干渉グループは、プリンキポ構想の行詰り、またウイルソンとロイド・ジョージがそれぞれバリエ離れた機会をと⁽³⁾らえ、連合国政策の転換をはかるべく攻勢を開始する。グループを代表して、攻勢の火の手をきつたのは、イギリスのチャーチル陸相であつた。

二月一五日、ロイド・ジョージを代理して、一〇人会議に出席したチャーチルは、動議を提出する。彼はまず、プリンキポ提案の本質を卒直簡明に、

「會議が開かれるとか、交戦中の各ロシア軍の代表がひとつのテーブルを囲むとかいうことは、提案にとって本質的なことではない。最も重要なことは、戦闘を中止することであり、即刻中止することである⁽⁴⁾。」

と、規定した後、プリンキポ提案後の軍事情勢に触れて、赤軍の進撃はやまない一方、心理的打撃をうけた反革命軍

の戦意は低下し、軍事的崩壊の危険な事態が生れていることを指摘する。そこで即刻休戦を実現するか、さもなければ反革命軍への援助の強化が必要であるとして、彼は、この目的のために、次の二つの提案をした。

第一は、休戦か、プリンキポ案打切りか、事態をいづれかに明確にすることであった。

「プリンキポ島提案を処理すべき正確な期間を定める必要がある。本月一五日より一〇日以内に、全戦線のボリシエヴィキ軍が攻撃を中止し、相手の前哨線より少くとも五マイルの地点まで後退しないときは、プリンキポ島の提案は、効力が消滅したものとみなさるべきである。」

第二は、プリンキポ提案が効力を消滅した場合の政策にかんしてであり、チャーチルは、「ロシア問題にかんする連合国委員会」 Allied Council for Russian Affairs の設立を提唱した。この委員会は、ロシアの隣接諸国、ならびに反革命政権と協力して、軍事行動をとる実際的可能性を検討することを、その目的とするものであった。しかも連合国の軍事代表をもって構成される「軍事部 Military Section」が「ロシア委員会」に所属するものとされ、「軍事部」は事態を検討して、適当な対策を連合国指導者に進言できるよう、即刻その活動を開始することが望ましいものとされた。^(c)チャーチル発言の重点が第二点におかれていたことはいうまでもない。しかも、「ロシア委員会」の設立についてのチャーチルの提案の狙いは、連合国のロシア政策を、連合国の軍事指導者の観点にしたがって形成しようとするものであり、それはとりもなおさずフランスのフォッシュ Foch, Ferdinand 将軍、イギリスのウィルソン Wilson, Henry 将軍といった、最も強硬な対ソ武力干渉論者の観点を前面にひき出して、対ソ武力干渉への途を開こうとするものに他ならなかった。

「ロシア委員会」設立について一〇人會議に出されたチャーチルの動議は、予想されたごとく、フランス、イタリア代表の強力な支持をうける。⁽⁷⁾しかしアメリカ代表は、チャーチルの提案した第一点については、賛意をしめしたものの、軍事的干渉への準備的措置を意味する「ロシア委員会」の設置については、決定の留保を要求した。⁽⁸⁾そして全權委員會議でこの問題を協議することとなる。⁽⁹⁾

ところで、チャーチルの「ロシア委員会」設置の提議は、ロンドンに驚愕をもたらす。というのは、チャーチルのパリ派遣を決定したイギリス政府の閣議は、ソヴィエト政府が休戦実行を拒否した場合には、反革命派に対する物的、精神的援助を強化するが、積極的な対ソ武力干渉には反対である、とする基本政策を決定しており、この範囲内で意見をのべる権限をチャーチルに与えていたからである。そこでロイド・ジョージは、チャーチルに宛、ただちに電報を送る。

「ポリシエヴィキとの戦争を企図しているとの、あなたの第二の電報に大そう驚きました。内閣はそのような提案をする権限をあなたにあたえたことはなく、またロシアの反ポリシエヴィキ地域の軍隊に、その地歩を確保できるよう、必要な物資を供給すること以上のことと考えたこともありません。平和的解決へのすべての努力が失敗に帰した場合にかぎって、これらのロシア軍隊に物質的援助をあたえる最善の方法について軍事的研究をするというのが、あなたにゆるされたすべてであります。⁽¹⁰⁾」

二月一七日、チャーチル提案をめぐって一〇人會議が開かれる。ここでハウスは、ブリス委員（連合国最高軍事會議へのアメリカ代表、前参謀総長）の作成した覚書を基礎に、「ロシアでの軍事行動を目的としたプランを準備する軍事委

員会に、アメリカは参加する意思のないこと」を、明白に告げる⁽¹¹⁾。会議は結局、各国の軍事代表が、非公式に、ロシア問題を討議し、その結果をそれぞれの代表団に報告すべし、とするバルフォアの代案を採択すること⁽¹²⁾で終つた。かくて武力干渉グループの策動は功を奏せず、これに代つて対ソ政策を推進すべく登場するのが、ソヴェト政府との「話し合い」により《ロシア問題》の解決をはかろうとする構想であり、ブリット・ミッシェンのモスコイ派遣として具体化する。

(1) Tammuly, op. cit., p. 374. ウィルソンとても同様であつた。「ポリシエヴィストは……世界で最も完璧な卑劣漢だ。自分たちが高い動機をもっていないものだから、他人までそうだと信じこんでいるのだ。トロツキーは、ニューヨークで数ヶ月暮したのだから、アメリカは資本家の手中にあり、資本家以外の何者の利益にも奉仕しないと立証できるつもりになつてゐる。」Ibid., pp. 374—375

(2) 積極的な武力干渉の立場は、英仏軍部を代表して、それぞれウィルソン Wilson, Henry, ノット Poch, Ferdinand によつてとられていた。とくにフォシヒは、在独ロシア俘虜(一〇万と算定されていた)と、ポーランド軍、チエク軍をもつて反ソ干渉軍を編成、武力をもつてソヴェト政権を打倒する構想をもち、しばしば連合国指導者に説いていた。Bliss Papers (Library of Congress), Bliss Diary, Jan. 7, 1919. 在独ロシア俘虜利用にひびいての「一月一日の『フォシヒ覚書』——U. S. Foreign Relations, 1919, Paris Peace Conference, III, 472—473, 479—481. 同日のポーランド軍にひびいての覚書——Ibid., pp. 471—472, 477—478. クロイツマンは「フォシヒの武力干渉方針に反対であり、さむねる『防役線』Cordon Sanitaire の設定による経済封鎖をもつて、ポリシエヴィキの没落をはかるべし」としてつた。Lloyd George, op. cit., p. 374. Fischer, op. cit., pp. 151—152.

- (3) ロイド・ジョージは、国内の労働争議の激化による社会不安の情勢に対処すべく、二月九日、またウィルソンは、上院の平和条約批准反対の動向が強まりつつある事態を考慮して、二月一四日、パリを離れる。
- (4) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, p. 60.
- (5) Ibid, pp. 60—61.
- (6) Ibid, p. 61: Churchill, Winston, The World Crisis, The Aftermath, 1929, pp. 173—174.
- (7) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 62—67.
- (8) Ibid.
- (9) 二月一七日のアメリカ全権委員会議。U. S. Foreign Relations, 1919, Paris Peace Conference, pp. 42—45.
- (10) Lloyd George, op. cit., pp. 371—372. チャーチル自身は、彼にあたえられた任務について、次のような叙述をする。
「……再三再四首相に対して明確な政策を示すように迫った。……首相は、最後に私に向って、貴下自らパリに赴き、われわれの制限された行動の範囲内において、いかなる行動をとりうるか、見きわめて来てはどうか」と提議した。」Churchill, op. cit., p. 171. シュタインは、「チャーチルはロイド・ジョージとの諒解の下にパリに赴き、首相はチャーチルの干渉計画を充分承知していた」ものとする。Stein, a. a. O. S. 95. なお、チャーチルの行動を知ったロイド・ジョージは、英政府の立場を弁明する目的をもって、チャーチル宛の電報の内容を、秘書をして、ハウスに知らしめている。この措置がチャーチルの憤激を買ったことはいうまでもない。House Papers, Diary, Feb. 17, 1919.
- (11) このプリス覚書は、U. S., Foreign Relations, 1919, Paris Peace Conference, XI, 44: Palmer, op. cit., p. 369. に見えるが、いずれも完全なものでなく、全文は、Bliss Papers, Box 69.
- (12) ランシングからホーク宛、二月一七日。U. S. Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 68—69: Anohnicloss Papers

(Yale University Library), Diary, Feb. 17, 1919; House Papers, Diary, Feb. 17, 1919. なぎ、シメタインは「この日の記録が公表されてないことに疑念をもち、この会議で、チャーチル提案の趣旨に沿った決定が下されたものと見る。Stein, a. a. O. S. 117-119. 大西洋上のウィルソンは、チャーチルの提案に驚愕し、武力干涉方針に絶対反対であるその意向をただちにバリの全権委員団宛、打電する(二月十九日)。U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 71-72.

さて、前に見たように、プリンキポ会議提唱の主要な狙いは、ヨーロッパ・ロシアの隣接地域とその住民に対するポリシェヴィキの軍事行動の中止であった。二月中旬、赤軍の進撃はさらにつづけられていた。リスアニア方面では、ドイツ国境に近接しており、ポーランド方面では、ピンスク占領後、ブレスト・リトウスクに向け前進していた。ウクライナ方面では、ドネツ地域の大部分はすでにその支配下にあった。東ヨーロッパからバルカン地域にポリシェヴィズムの浸透する危険は日毎に増大していた。かかる客観情勢の展開は、アメリカの全権委員団をして協定を通じてポリシェヴィズムを「封じこむ」必要を一層強く感ぜしめていたであろう。と同時に、北ロシアに駐留するアメリカ軍の危機的状況をつたえる情報も、バリのアメリカ全権委員団をして事態を深く憂慮せしめたことにわれわれの注意は払われねばならない。当時北ロシアのアルハンゲルスク Archangel'sk 地方に、約四千のアメリカ軍が、英仏軍とともに派遣されていたが、対独勝利の後も駐留がいぜん継続することに、兵士は派遣目的に疑惑を示しだしていた。⁽¹⁾その上連合国の軍隊相互の間になえず軋轢が発生し、一方ロシア住民の派遣軍への反抗は次第に高まっていた。⁽²⁾このような情勢のうちに零下三〇度の厳寒期を迎えたアメリカ軍將士が、その戦闘意欲を著しく減退せしめたことは自然であり、指揮官の目には叛乱の兆候さえ看取されるようになってきた。⁽²⁾ところで、一月一八日、赤軍はこの地域で総

攻撃を開始し、数日後にはこの地方での第二の都会シェンクルスク Shenkursk の陥落を見ることとなり、北ロシア駐留のアメリカ軍にとって、極めて憂慮すべき事態が出現してきた。現地指揮官の救援の要請に、代表部の情報専門家ブリット Bullitt, William は一月三〇日、ハウスの注意を喚起して覚書をしたためる。

「……アルハンゲルの事態は、駐屯軍にとって極めて深刻であるのみならず、軍隊を派遣したまま放置しているかに見える政府にとっても極めて重大である。即刻手を打って彼らを救わないならば、第二のガリポリとなるであろう。」⁽³⁾

一方北ロシア派遣の米軍にたいするアメリカ国内の関心もようやく高まり、その撤退を要求する声は、上院でも、また新聞論調でも次第に強力になりつつあった。⁽⁴⁾ このような情勢に、アメリカ全権委員会議は、二月一日、ブリットの覚書を検討し、できるだけ早い時期に米軍をアルハンゲルスクからムルマンスク Murmansk に移動することの必要について意見の一致を見た。⁽⁵⁾ さらに二月一七日には、陸軍長官ベーカー Baker, Newton D. は、国内世論の不满に依りて、北ロシア米軍の早期撤退を一般に声明する。⁽⁶⁾

ところで、問題は撤兵の方法であった。すでに氷に固くとざされているアルハンゲル港からの撤退は、春の解氷期まで技術的に不可能な状態にあった。そこでバリのアメリカ政府指導者は、撤退作戦への準備として、鉄道ニヶ中隊の同地区への増援を決定する一方、⁽⁷⁾ 春の解氷期までの時を稼ぐため、何らかの措置に出る必要があった。ソヴィエト政府との休戦協定締結にせしめたアメリカ指導者の強い意欲は、この北ロシアの軍事情勢との関連において見ると、一層の理解がえられる。そして二月四日のソヴィエト政府の回答が、休戦実行の確約をさけたとき、その真意を探る

必要が、アメリカ代表部内で強く感ぜられたのである。

プリンキポ会議行詰りの事態を憂慮した陸軍の情報将校ペティット Pettit, W. W. 大尉——ブリット・ミッシュンの一員となる——は、二月一日、ブリットに宛て、覚書を書く。

「連合国にとって、ポリシェヴィストに即刻休戦を申入れる必要は緊急なものである。

連合国軍隊が北ロシアで直面している危機的状況は、連合国が即刻行動に出ることを要求している。アルハングルのわが陸軍武官からの報告によると、同地区からの人員、資材の撤収は、軍事的に見て實際上不可能である。ホワイト・シーは凍結しており、陸つづきの転進も可能でない。

軍事的災危の可能性と、その結果おこりかねない世論の報復への要求の可能性を考えると、事態の重大さは、一月二二日の連合国招請の中にある休戦提案にかんして、即刻、行動をとることを促しているものと思われる。⁽⁹⁾ブリットは、ペティットから伝達された情報を、ただちにハウスに回送し、休戦の緊要さについての彼自身の意見を進言する。

「軍事的災危の可能性にかんがみて、連合国は、全戦線にわたり、ただちに休戦するようポリシェヴィキに申入れるべきであると考えられる。⁽⁹⁾」

北ロシアの軍事的状況の危急さについて、とくに鋭い意識をもっていたブリット、ペティット兩人がモスコに派遣されたことは、その派遣目的についてひとつの示唆をあたえているように見える。

(1) Dulles, R. D., *The Road to Teheran*, 1944, pp. 143—144.

- (2) Schuman, F, American Policy toward Russia since 1917, 1928, p. 136.
 - (3) Wilson Papers, Series VIII—A, Box 16: Schuman, op. cit., p. 136.
 - (4) 二月一日、ジョンソン Johnson 上院議員は「アメリカ軍隊が即刻ロシアから撤退すべしとする決議文を上院に提出した。」
 - (5) U. S., Foreign Relations, 1919, Paris Peace Conference, XI, 10.
 - (6) New York Times, Feb. 18, 1919, Unterberger, Betty M., America's Siberian Expedition, 1918—1920, p. 136.
 - (7) 大統領の諮問に依じて、「ノリスは二月二日、撤兵に必要な鉄道を、良好な状態におく限られた目的のために、鉄道二ヶ中隊の増遣に賛成した。Bliss Papers, Box 174.
 - (8) Department of State Papers, National Archives, Paris Peace Conference 861.00/233.
 - (9) 二月一日、ブリットからハウス宛。House Papers.
- 二月八日、ブリットは、ランシング國務長官から、「非公式」の資格で、「政治・経済情勢を調査する目的のために、モスコウに赴くよう、公式の指令書をうける。⁽¹⁾ブリットに託された任務は、二月四日の回答が確約をさけた休戦問題についての、ソヴェト政府の真の意図を打診すること、またソヴェト権力の支配地域の実情についての正確な情報を得ること、とにあった。⁽²⁾ただランシングによって、ブリットの選任とその使命に与えられた意味の軽かったことは、「ブリットのポリシェヴィキ病を癒すため、彼をロシアにやることについて、ハウスと話し合った」とする二月一六日の彼の卓上日記がこれを示している。⁽³⁾
- ブリット・ミッションは二月二二日、パリを出发、まず、イギリスに渡り、ここで、イギリス巡洋艦に便乗の便宜

を⁽⁴⁾えて、ノルウェー、スエーデン、フィンランドを経由、三月八日にベトログラードに到着する。翌九日、チチュリン、リトヴィノフと予備的折衝をした後、モスコーに行き、ここで三月一日から一三日まで、レーニンを交えて会谈をした。

ところで、ブリットは、レーニンその他との会見において、休戦問題についてその真意を打診するにとどまらず、連合国とソヴィエトとの正常国交関係を回復する基礎となるべき「連合国条件」を、ソヴィエト側に提示し、これを中心にレーニンと外交交渉を行ったのである。ブリットが提示した「連合国条件」は、次のごとき内容のものである。「連合国は次の提案をする。三月二十五日、全戦線において、戦闘行為を中止し、四月一〇日、ブリンキボで会議を開くものとする。会議の期間中、休戦状態はつづけられるべきである。会議は、次の点を基礎にして、平和を討議するものとする。

(1) ソヴィエト政府と連合国政府の双方は、ロシアに現存する事実上の政府を、力によって覆滅する意図のないことに同意する。すべての現存の事実上の政府は、現在占領する地域の完全な支配権を、その住民が自ら政府の變更を決定するにいたるまで、もつものとする。

(2) ソヴィエト・ロシアと連合国との通商関係を復活する。ただし、連合国の供給物資は、階級の別なくすべてのロシア国民に、平等な条件で、行渡るものとする。

(3) ソヴィエト・ロシアは、ロシアと海洋とを結ぶ輸送に必要な鉄道、港に対して権利をもつ。ただし、その他のヨーロッパ地域にある国際鉄道、国際海港に適用されると同一の規定にしたがうものとする。

(4) ソヴィエト・ロシアの国民は、政治に干与しないことを条件に、連合国に入国する権利と、入国と自由な営業を可能にする完全な保障をあたえられるものとする。連合国民も、ソヴィエト・ロシアにおいて、同様な条件にしたがい、同様な権利と保障をもつ。

(5) ソヴィエト政府と連合国政府の双方は、すべての政治犯罪人、——ソヴィエト政府に反対した軍隊を助けたこれに参加して戦ったすべてのロシア人を含め——に、恩赦をあたえるものとする。

(6) ソヴィエト政府が、軍隊の規模の縮小、その他の形で、本協定の条項を遵守していること、または遵守の意図のあることを明白にし次第、ただちに連合国軍隊はすべてロシアから撤退する。

(7) 連合国に対するロシアの債務と関連したすべての問題、その他は、平和樹立後、別箇に審議されるものとする。⁽⁵⁾
このような重要な内容をもつ「連合国条件」を携行したブリット・ミッシェンを迎えて、モスコの指導者は、ミッシェンの資格に対する評価をめぐり、また「連合国条件」を基礎とする協定締結の是否をめぐり、見解の分裂を見せた。トロツキー⁽⁶⁾ Trotsky, J. その他は連合国との休戦協定締結に反対であり、またブリットの資格に疑問をもっていた。⁽⁶⁾一方、レーニン派は、ブリットをウイルソン大統領の特使として理解し、「連合国条件」を連合国政府からの正式の申入れとみなし、協定成立への熱意をしめす。チチェリンが、「連合国条件」に附した大きな意義は、ラコフスキイトに、

「了解の成立が失敗するならば、封鎖政策は、一段と力を増して強行されるであろう。」⁽⁷⁾
として、告げられたのである。⁽⁷⁾

ブリット・ミッシェンをこのような基本的視点において把握したレーニン派は、「連合国条件」に若干の修正を加えた「対案」を出す。⁽⁸⁾「対案」が示した主要な修正点は、休戦と撤兵条項にかんするものであり、前者については、レーニンは、「休戦実施の期日は、連合国が平和提議〔この協定にもとづく〕を発してから、少くとも三週間後」として、休戦実施の期日の明示を避けた。また撤兵については、連合国は、協定の調印後、無条件でただちに実行すべきものとした。さらに加えて反革命軍への軍事援助の中止をも同時に実行すべきものとした。このように最も基本的な点で、修正要求を出し、その他の点では「連合国条件」を容認し、結局、「対案」の線に沿って連合国政府が平和提議を發した場合、ソヴェト政府は、これを受け入れ、連合国政府と協定を結ぶ用意ある旨、レーニンとブリットの間で了解の成立を見る。⁽⁹⁾ブリット・ミッシェンに対してとられた、このレーニンの戦術が、プレスト・リトウスク講和以来一貫して採用されている「息抜き」戦術の反復であり、⁽¹⁰⁾「大切な物を保存するために重要な点で譲歩することである」という点にあったことはいまでもない。

(1) Bullitt, William, *The Bullitt Mission to Russia, 1919*, p. 4: U. S., *Foreign Relations, 1919*, Russia, p. 74.

(2) 一九一九年七月一日「カー Kerr, Philip H. からグラハム Graham, Sir R. 宛。Documents on British Foreign Policy, 1919—1939, Ist Series, 1919, 1949, III, 425—426. なお「フリンター」元来 Philadelphia Public Ledger の記者であり、戦争中は、国務省で、ドイツ、オーストリアの情報分析を担当、平和会議では、全権委員に直屬して、これに情報を提供する任務についていた。正確には「Division of the Current Intelligence Summaries」の主任であった。また彼に同行するステイト Pettit, Walter W. は、陸軍情報部の大尉であり、キヌコー派遣に際しては、陸軍将校である身分は秘され

た(二月二日、グノー Grew からチャーチル Churchill 將軍宛、*Bullitt Papers* [Yale University Library], No. 26)。その他、ミッションにはリンチ Lynch, R. E. それに純粹に個人の資格で、ジャーナリストのステュメンヌス Steffens, Lincoln が加わり、一行は四名であった。

シュタインは、ブリットの使命について次のように書いている。「ウイムソンが、ブリットをソヴィエトに派遣した目的は、……真のプランを陰蔽し、偽装した形の干渉を準備するための時を稼ぐことであつた。ブリットの使命は、ソヴィエトとの交渉にあつただけではなく、ソヴィエト政権の地位の安定の程度、また經濟状態、交通機関の状態、その他について情報をえることであつた」(傍点は筆者)。Stein, a. a. O. S. 140.

(3) Lansing Papers, Desk Diary, Feb. 16, 1919.

(4) Bullitt, op. cit., p. 47.

(5) Bullitt Papers, No. 26.

(6) トロツキーは、休戦実施は、連合国に反革命軍への武器援助をゆるす時間的余裕を、あたえるにすぎない、としてこれに反対の意向を示していた(四月四日、ブリットからアウキングロス宛、*Bullitt Papers*, No. 25)。シノヴィエフの休戦に対する反対態度は、前述の、一月二七日の演説、「彼らは、われわれを粉碎するに充分な力をもつていない。そこで何らかの方法で、われわれの牙を抜こうとしている。……そのために、われわれを甘言でたぶらかそうとしたり、尻尾を振ったりしているのだ」といふ言葉によく示されてゐる。Dennis, op. cit., pp. 78—79。シノヴィエフはまた、ブリットの資格に多分の疑問をもつてゐた。そこで彼は、ブリットと折衝すべく正式に任命された委員であつたにもかかわらず、ブリットが交渉の全権を付与されてなごことを知ると、その任務遂行を拒否した。Steffens, Lincoln, *The Autobiography of Lincoln Steffens*, 1931, pp. 792—793.

(7) Fischer, op. cit., p. 101. チャチェリンはまた、ブリットを「ロイド・ジョージの了解のもとに、ウィルソン大統領が送った使節」と理解した。Chicherin, G. V., *Two Years of Soviet Foreign Policy, 1920*, p. 30.

(8) 英文で書かれた「対案」がブリット文書中に見えるが、字体は、明らかにソヴィエト側でこれを印刷したものであることを示している。Bullitt Papers, No. 26.

(9) レーニンの「対案」に、若干の字句的修正を加えて、レーニン、ブリット間に了解が成立し、それがブリットによって、パリに報告される「ソヴィエトの平和提議」となる。U. S., *Foreign Relations, 1919, Russia*, pp. 77—80.

(10) Порёкин, цит. соу., стр. 63.

ところで、すでに見たように、ブリットがランシングから付与された任務は限局されており、「連合国条件」の提出、さらにこれを基礎にしてのソヴィエト指導者との交渉といったブリットの行動は、アメリカ政府の予めこれを公式に承認していたものではなかった。この点について、ソヴィエト指導者は、明らかな錯誤をおかした。それではブリットの行動は純粹に個人的な恣意にもとづいていたものであったろうか。また連合国の公式の提案としての印象をソヴィエト指導者にあたえた「連合国条件」は、彼の創作に由来するものであったろうか。ブリット・ミッションをめぐる問題点のひとつはここにある。

この点にかんして注目されるのが、ハウスとロイド・ジョージの秘書、カー Kerr, Philip の果たした役割である。ハウスは、休戦の必要性への認識と同時にそのバアー・ポリテイクスへの価値関心から、ソヴィエト政府との平和協定成立を強く希望していた。ハウスがブリットにどのような具体的指示をあたえたかは、必ずしも明確ではない。しかしブリット・ミッション派遣決定にあたって、ハウスの意向が強く作用し、またブリットに、公式の指示以上の任

務をハウスが与えたことも疑いがないように見える。パリ出発を前にしたブリットは、ハウスから休戦成立と交換に、(1)連合国軍は、ロシアから撤兵する、(2)通商関係を再開する、(3)食糧その他必需物資の提供をはかる、といった三点について、アメリカ政府は同意の用意がある旨、告げられている。⁽²⁾ このハウスの言明は、「連合国条件」の骨子を示しており、ブリットに、ソヴェイト政府との交渉に対するハウスの支持を期待せしめるものであった。⁽³⁾

ブリットは、レーニンとの交渉において、ハウスの支持を確信すると同時に、彼を通じて、アメリカ政府の承認があたえられることを期待していた。さらに彼は、交渉に対するイギリス政府の支持についても、これを信ずる理由をもっていた。パリ出発の直前、ブリットはカーと意見の交換をするが、その際、カーは、連合国とソヴェイトとの「正常な関係を再開することを可能にする」八条件についての彼の見解を、覚書として、ブリットに手交した。実は「連合国条件」なるものは、このカーの覚書に若干の修正を加えたものにはすぎなかったのである。⁽⁴⁾ カーは、この覚書は、あくまでも私的な見解の披歴にすぎないことわっている。⁽⁵⁾ が、カーとロイド・ジョージとの特殊な関係にかんがみて、ブリットがこの覚書の上にロイド・ジョージの考えの反映を見たとしても、一向に不思議はなかったのである。⁽⁶⁾

ところで元来、ブリットはアメリカ代表部内において進歩派の陣営に属していた。⁽⁷⁾ この派においてソヴェイト政府との「話し合い」の政策が推進され、とくにレーニン派との外交的接觸、これの強化が意図されていたことは、ブリット・ミッシェンとの関係において、注目に値する。ことにアメリカ代表団のロシア部においてこの派の見解は有力であり、その代表的なものとしてモリソン *Morison, S. E.* のそれを見ることができらるであろう。

「……今や〔ソヴィエト政府との〕話し合いの好機である。……われわれはポリシエヴィズムとソヴィエト制度とを区別する必要がある。前者は、恐怖政治であり……後者は、フランス革命以来最初の、新しい、社会、経済、政治制度を樹立せんとする企図である。……話し合いの政策から予想される結果は、ポリシエヴィキ党のうちレーニン派がソヴィエト制度を、支配することとなり、右傾化を辿るということである。そしてやがては資本主義と妥協するにいたるといふことである……」⁽⁸⁾（二月二十四日、モリソンからロシア部主任、ボウマン Bowman, Isaian 宛）。

かかる分析と観測は、イギリスの進歩派も共通にもつところであり、たとえば、デイリー・メールのランサムは、「干渉政策の経緯は、ソヴィエト政府部内の過激派の術策に陥るだけであり、これに反して、ソヴィエト政府との協定は、過激派の勢力を弱め、穏健派を強化することにならう。そして貿易と工業を復活して繁栄をもたらせば、それこそポリシエヴィズムの解毒剤としてこれに勝るものはない。」⁽⁹⁾

とのべる。このような見解が「話し合い」政策の実現に働き、ブリット・ミッシュンの使命の中に浸透していたことも推測できるところである。これとの関連において、プリンキポ提案を受けたソヴィエト側から、「連合国のプリンキポ提案は、レーニンの代表する穏健派を強化する効果をもった」とする、リトヴィノフの言葉が、伝えられてきたことも興味深いところである。⁽¹⁰⁾

やがてモスコーから「ソヴィエトとポリシエヴィズムの差異」を説き、レーニン派の穏健的性格を強調するところのブリットの報告がバリーに伝えられてくる。⁽¹¹⁾

(1) ステュフェンスの自伝によると、ハウスの構想に対して、ステュフェンスの示唆が大きな影響をもったようである。Steuers, op. cit., pp. 790—791. しかしアウキンクロスの日記は、ハウスが、プリンキボ案以前に、実情調査を目的とした委員会のロシア派遣を考慮していたことを示している。しかも、この委員会に参加するアメリカ側の委員は、「革新派」から選ばるべきことを提言している点は、あるいはブリットを意中にしていたとも考えられ、興味深い。Auchincloss Papers, Diary, Jan. 13, 1919.

(2) Bullitt, op. cit., pp. 34—35.

(3) ハウスとブリットとの関係を示す文書として、興味深いのは、三月四日、訪ソ途上のブリットが、ハウス宛にストックホルムから打った電報である。

「……ソヴィエト政府の条件をしるしたステートメントを送り次第、私が一刻も早く帰って、人々の説得に当たった方が、バリ側に都合がよいのか、または私はベトログラードにとどまるべきか、あなたの御意見を電報でお聞かせ頂いたら幸せです。あなたもいわれておりますように、難関はバリにあります。しかし何とかこれを突破しなければなりません」。House Papers.

(4) Bullitt, op. cit., pp. 36—37. ステュフェンスは、この点について興味ある記述をなす。「ロンドンへの車中、ブリットは、鉛筆書きの一片の紙を見せてくれた。それは、ロイド・ジョージの秘書カーが、ポリシェヴィキの同意すべき条件として、七項目をしるし、ブリットに与えたものだった。ブリットのうけた指令は、ロシアと予備的協定について交渉することであった。……」Stelens, op. cit., p. 791. このブリットがステュフェンスに示した、七条件についての鉛筆書きのメモこそ、ブリットが、カーの覚書に修正を加えたものであり、やがてソヴィエト側に「連合国条件」として提出されるものに他ならなかった。American Commission to Negotiate Peace とマークが入ったメモ用紙に、鉛筆書きで七条件がしるされたものは、ブリット文書中に保存されている。Bullitt Papers, No. 26.

(5) Bullitt, *op. cit.*, pp. 36—7. 一九一九年六月から七月にかけて、英米の新聞、雑誌は、ブリット・ミッションについて記事をかかげ、ブリットが「連合国条件」を提出したこと、またそれはカーの起草にかかるとあるものについて、素破ぬきをしている。たとえば、*The Nation, Morning Post* (June, 20, 1919), *The Call*。そこで英外務省は、この問題が、議会でとり上げられた場合の対策として、カーに真相の説明を求めている。これに答えた七月一日の、カーの手紙は、ソヴェト政府との「和解の基本的条件」について、その意見をブリットにのべた点を肯定している。同時に、それが純粹に私的な意見である点を、ブリットに明言したこともしている。Documents on British Foreign Policy, *op. cit.*, pp. 425—426. とここで、後に(九月二二日)、ブリットは、上院でそのミッション派遣の経緯について証言するが、この際は、カーはこの証言をもって「うそのかたまり a tissue of lies」として、否認した。

(6) カーは、ブリットに「ロイド・ジョージ及びバルフォアとすべての問題を検討した」旨、告げている。そこでブリットは、「イギリス政府が受け入れる条件について、カーは充分の知識をもっていられたものと考えた」。Bullitt, *op. cit.*, pp. 36—37.

(7) ブリットは、「アメリカ全権委員団内部では、周囲から「過激派」と目されていた。しかし、その立場は、いわば社会民主主義に属していた。彼はヨーロッパにおけるプロレタリア革命発生阻止策として、ヨーロッパ各国における、社会民主主義勢力の強化をはかることを意図し、その意見をしばしば大統領、ハウスその他に具申ししている。

(8) House Papers, No. 210.

(9) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, p. 17.

(10) 二月一五日、英外務省政治情報部「報告書」Political Intelligence Department, Foreign Office (Gt. Britain), Russia 1020——これは國務省記録の中に存在する。Department of State Papers, National Archives, Paris Peace Conference,

(H) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 81—89.

さて、モスコーでの交渉を終了したブリットは、結果をただちにバリに打電する。

「モスコーでのチチェリン、リトヴィノフとの日々話し合い、またレーニンとの会談を終了し、三月一四日、次のようなステートメントをチチェリンから受けとった。……」⁽¹⁾ (傍点は筆者)

そしてチチェリンから受けとったステートメントとして、この報告がしるしたのは、レーニンの「対案」に若干の字句上の修正を加えたものに他ならなかった。しかし話し合いの初めにブリットが「連合国条件」を提示したことに ついては、報告は一言も触れるところがなかった。

ブリットの報告にハウスは満悦した。⁽²⁾ 彼はこの報告を受けて、「遂に厄介な問題から脱け出す途を見つけた」かに感じた。⁽³⁾ というのは、「レーニン提案」が、休戦実行を約束したのみならず、「現在の事実上の政府は、現在占領する地域に対し完全な支配権をもつ」ことを認めたことで、ロシアが複数の政府により分割統治される可能性を見たからである。一方、他の全権委員ランシング、ホワイトは、「ソヴェートの平和提議」を受諾することについて躊躇の色を見た。⁽⁴⁾ それは休戦をこえて余りに広汎な問題についての協定を意味するものに見えたからである。しかしこの「平和提議」が、アメリカ政府によって受け入れられるか、否かは、いうまでもなく一にウィルソンの態度にかかっていた。⁽⁵⁾ 三月二五日、バリに帰着したブリットは、その足でハウスの許に赴き、モスコーでの活動について委細を報告する。つづいて、ブリットはソヴェート政府との協定を実現すべく、ハウスともども各方面の説得工作を開始する。イタリアのオルランド Orlando, V. E. 首相に対するハウスの働きかけは成功した。⁽⁶⁾ またブリットの報告を聞いた、イギリ

ス政府の首脳部⁽⁷⁾、さらにアメリカ全権委員らの反応も有望なものに見えた⁽⁸⁾。しかしかんじんのウィルソンは、「レーニンの平和提議」に対し、一向に興味を示すところがなかった。三月二七日、ハウスと会見したウィルソンは、食糧救済委員会のロシア派遣案をもって、当面の《ロシア問題》の解決をはかりたい意向を告げている⁽⁹⁾。このウィルソンの「レーニン提案」に対する冷淡な態度は、問題の帰趨にとって決定的な意味をもった。やがてロイド・ジョージは、四月中旬、議会で答弁して、ボリシェヴィキに対しては、「いかなる種類のアプローチをしたこともない」とのべ、ブリット・ミッシェンとの関係を否定したのである⁽¹⁰⁾。

ところで、連合国政府による「レーニン提案」の拒否は、「レーニン提案」が本来「連合国条件」に対する「対案」としての意味をもつことを知り、しかも「連合国条件」を連合国政府の公式の提案として理解している側にとつては、連合国政府指導者の態度の「豹変」として解釈され、この「事態の急変」の理由は、三月末のウラル戦線におけるコルチャク軍の急速な進撃を大々的にとり上げ、モスコー陥落近しと騒ぎ立てたパリ諸新聞の報道に帰せしめられたのである⁽¹¹⁾。

ところで、「レーニン提議」に示した、ウィルソンの冷淡な態度は、どのような理由にもとづくものであったろうか。これについて、種々の点が考えられるであろう。コルチャク軍の進撃の成功も、そのひとつとして数えられるであろう。しかしこの点を余りに過大視することはできないようである。というのは、コルチャク軍進撃についての報道を、この時期のウィルソンがどのように評価したにしろ、彼は、ヨーロッパ・ロシアから中欧にかけての事態の発展に、一層強く休戦の必要を感じていたからである⁽¹²⁾。したがって、休戦の実現をはかるべく、ソヴィエト政府への新しい形

のアプローチを考慮していたからである。それは、休戦の実現と交換条件に、食糧を供給せんとするナンセン救済委員案に他ならなかった。

「レーニン提議」に対するウイルソンの無関心さは、むしろクレマンソーとの関係への考慮に発するところが大きかったようである。三月中旬、アメリカからバりに帰着したウイルソンは、モンロー・ドクトリンにかんする留保条項を国際連盟規約中に挿入すべく、四人会議の同意をうるため、大きな努力を傾注していた。国際連盟の設立は、平和会議にのぞんだウイルソンにとって、一切に優先する最高の目標であった。そして連盟規約の上院批准をめぐるインナー・ポリティクスの要請は、モンロー・ドクトリンにかんする留保を不可欠のものにしていたのである。⁽¹³⁾

ところで、この点について四人会議の同意をうるためには、ウイルソンは、ある程度他の問題で譲歩することも覚悟せざるをえなかつた。⁽¹⁴⁾ そのような会議の段階において、クレマンソーの反対意思がすでに表示されている問題、すなわちソヴィエト政府との協定——広汎な内容を含んだ一般協定——の問題をとり上げて、クレマンソーとの対立を激化することの不得策は明白であった。したがって、クレマンソーとの対立を避け、彼の同意を望みうる形で、ソヴィエト政府と休戦のとりきめを成立させようとしたのが、ウイルソンが、「レーニン提議」を却けて、ナンセン案を選択した理由であつたものと思われる。それとともに、ブリット・レーニン交渉が、ウイルソンの指示なしに、ハウスとブリットの了解のもとに進められたかに見えたことへの不快の念も、「レーニン提議」に示したウイルソンの冷淡な態度にあずかって力あつたものと考えられる。三月中旬以来、ウイルソンとハウスの関係は冷却化し、やがて決定的な断絶にいたるが、その理由のひとつは、「ハウスを競争相手と見るウイルソンの神経の過敏さと、自己の働きにふ

さわしい評価をもとめる、ハウスの強い欲望」とにあらたといわれているからである。⁽²¹⁾

- (1) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 77—80
- (2) ハウスは、早速ブリット宛に祝電を打つよう依頼するが、それはアメリカ全権委員団の名前で送られようとしたため、横槍が入り、結局打電されずに了った。U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, p. 46.
- (3) 三月二五日、ハウス日記。House Papers, Diary, March 25, 1919.
- (4) 三月一九日、全権委員会議は、ブリットから打電してきた「ソヴィエトの平和提議」について、意見の交換をした、ハウスは賛成、ホワイトとランシングは反対、とランシングの卓上日記はしるす。Lansing Papers, Desk Diary, March 19, 1919
- (5) ウイルソンは、「連合国条件」を全く関知してゐなかつた。そこで七月、ネーシオン誌がこの点についての記事を掲げたとき、ウイルソンは、「秘書のテュミュルティ(Tumulty, J. P. 宛に次のような手紙を書いた(七月一七日)。「これは驚くべき記事である。そこに掲げられてある『連合国条件』はまったく自分の知らないものである。また私は『ネーシオン誌が、パリから直接受けとった報道にもとづくものとして、ブリット、ステュフェンス両人は、ロシアに覚書を携行し、その覚書は、ロイド・ジョージの私設秘書カーの手でしたためられたもの、とのべる立場にある』とは片ときたりと信じえなう。」Wilson Papers, Series I, Box 159.
- (6) 三月二六日、ハウス日記。House Papers, Diary, March 26, 1919
- (7) 三月二七日、ブリットはロイド・ジョージと朝食をとるにす。これには、スマッツ Smuts, J. C., ハンキー Hankey, M., カーも同席する。Bullitt, op. cit., pp. 66—67.
- (8) 三月二六日、ブリットは、アメリカの全権委員に「その使命の成果を報告する。これに対して、全権委員は、「これにもとづいて、平和をもたらすよう試みる事が極めて望ましい」とのふた言、ブリットはしるすが、Bullitt, op. cit., p. 66. ャ

ランシングの日記には、何らこれを哀惜する記述を見出しえない。ランシングはただ、ブリットがレーニンを礼讃したこと、また「ソヴェイトとボリシェヴィズムの差異」を強調したことをしるすのみである。Lansing Papers, Desk Diary, March 26, 1919.

(9) 三月二十七日、ハウス日記。House Papers, Diary, March 27, 1919.

(10) Bullitt, op. cit., pp. 94—95.

(11) ソヴェイトの学者も、西欧の学者も、「ブリット・ミッションの使命の挫折」の原因については、立場を同じくし、コルチヤク軍の軍事的成功を強調する。Портёмкин, итг, соч., стр. 64—65; Stein, a. a. O. S. 137. タニン、前掲書、一二三頁、Fischer, op. cit., pp. 177, 182—184; Schuman, op. cit., p. 134; Dulles, op. cit., p. 148.

(12) たしかに、三月以来、ウラルの戦局は反革命軍に有利に展開しつつあった。しかし西方においては、ボリシェヴィズム拡大の危険は一向に衰えるどころか、むしろ増大の傾向を露わにしていたのである。連合国に何よりもショックを与えたものとして、三月二一日には、ハンガリーで、ベラ・クン Bela Kun による共産主義革命が成功を見たし、ドイツ各地でも社会不安はいぜん経続し、やがて四月五日にはバヴァリアでソヴェイト政権樹立を見る。ウクライナの戦局も反革命軍及びこれを支持するフランス軍にとって極めて不利で、四月五日、オデッサが陥落し、フランス軍はウクライナ方面から駆逐される。また西方に進撃した赤軍は、東ガリシアの国境に達し、ハンガリーの革命軍と連絡の形勢を示すにいたっていた。

(13) George, op. cit., pp. 252—255.

(14) Ibid., p. 255.

(15) Ibid., p. 246.

五 ナンセン救済委員会

プリンキポ構想が具現せず、ブリット・ミッシェンの使命が失敗したとき、アメリカ代表団内部における対ソ政策のリーダーシップは、フーヴァ Hoover, Herbert (食糧局長官)、マコーミック McCormick, Vance (戦時通商局長官)ら、経済グループ Economic Group の手に移ることとなる。

ナンセン救済委員会の基本的構想は、三月二八日、フーヴァからウィルソンに宛てた長文の覚書で示される。

「廉潔と手腕において国際的声望のある中立国人が、ロシアを対象にした第二のベルギー救済委員会を、創設することを認めるべきである。」

ただし、それは、

「ポリシエヴィキが、確定された国境線を越えて、軍事行動を行うことを一切中止し、外国の動乱への援助を打切る。」

ことを条件とする。そしてこの措置から予想される効果として、

「このような取極めができた場合、少くとも、ヨーロッパの周辺地域に、一定期間、静謐をあたえることになる。また安定への希望をもたえることであろう。またこの全組織 (ポリシエヴィズム―筆者) が、世界に対して危険であるか、どうか、またロシア国民が自ら穏和へ復帰し、ポリシエヴィズムの考え方を破産せしめることがないか、どうか、判定に必要な時をえることができる。……」⁽¹⁾

同じ日、この問題に重要な役割を演じた代表部員のアウキンクロス Auchincloss, Gordon (ハウスの女甥) は、日記にしている。

「ポリシェヴィキと取引することは絶対不可能である。同時に、何らか手を打たないならば、ポリシェヴィキ軍はヨーロッパ全部をその手中におさめてしまふであらう。」

ロシアに食糧救済委員会を送る構想は、かねてからフーヴァ、マコーミックらの抱くところであり、その実現を求めて、すでに各方面に働きかけがなされていた。⁽³⁾ しかもこの構想は、アメリカ代表団内部にのみとどまらず、すでにプリンキポ案提唱当時、これに不満な英仏の政府指導者により代案として考慮されていたのである。たとえばバルフォア英外相は、ロイド・ジョージに宛、一月十九日、覚書を送り、

「名目上の任務は、救済問題についてポリシェヴィキと交渉することであるが、同時に政治的な打診の任務をもった、食糧委員会をモスコに派遣すべきである。」

と提言している。さらに注目すべきことは、ウィルソンがプリンキポ案を公表する直前、クレマンソーが次のような形で、ウィルソンとの妥協を考慮していたと伝えられたことである。

「主要な目的は、ポリシェヴィストが隣接諸国を攻撃するのを防止することである。ではわれわれは彼らに告げようではないか。『隣人への攻撃を止めよ。食糧が欲しいのなら、そして公平に配給する証拠を見せさえすれば、われわれはこれを供給しようではないか。』」

かくて、休戦実現のひとつのストラテジーとして描かれた食糧救済委員会の構想は、フランス政府の同意をも期待し

うるものであった。

ところで、この構想を支えたもうひとつの動機として、「空の胃袋はボリシェヴィキを意味し、満ち足りた胃袋はボリシェヴィキに非ざることを意味する」(ランシング)という見解をあげることができよう。⁽⁶⁾それはアメリカ全権委員団を支配した見解であり、⁽⁷⁾ウィルソン自身、「ボリシェヴィズムを防止する問題の本質は食糧にある」(一月一日、ランシング宛)としるすのであった。⁽⁸⁾最後に、アメリカ政府の、ロシア救済委員会設置への積極的態度の背景に、国内の余剰農産物処理の強い経済的要請があったことを見のがすわけにはゆかない。⁽⁹⁾

(1) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 100—102. フーヴァはまた、三月二七日、アウキンクロスに、食糧救済委員会のプランの狙いを、次のように語っている。「ポーランド、ルーマニア、チェッコスロヴァキアといった、われわれがすでに独立せしめた国々に対し、ロシアがその軍隊をもって干渉しないことを条件に、ロシアに食糧を送る……かくて、戦闘の中止とともに、ボリシェヴィキ軍は解体するであろう。またロシア国民への食糧の配給は、彼らをして煽動政策の継続に乗気ではなくせらるゝ。」Auchincloss Papers, Diary, March 27, 1919.

(2) Ibid., March 28, 1919.

(3) 一月三〇日、マコーミックは、ロイド・ジョージとの会見の際、「配給を保護するのに充分な軍隊をつけて、ベトログラードに食糧を送る救済プランを提案した。」McCormick Papers (Library of Congress), Diary, Jan. 30, 1919. マコーミックは、さらに三月一日、ナンヤンと会談をこぼらる。Ibid., March 18, 1919.

(4) Wiseman Papers, Diary, Jan. 19, 1919.

(5) Lloyd George, op. cit., p. 346.

(6) Lansing Papers, Confidential Diary, Oct. 28, 1918; 一九一八年十一月一日、ランシングからスミス宛書翰。Lansing Papers, Vol. 40.

(7) 「空の胃袋は、食べるものが何も無いことだが、ポリシェヴィズムは、空の胃袋を食べて生きている。」これはブリスが、妻に宛てた手紙の一節である。Palmer, op. cit., p. 366.

(8) Wilson Papers, Series VIII—A, Box 9.

(9) ホワイトは、一月八日、上院外交委員長ロッジ Lodge, Henry C. に手紙を送って、救済活動に対する財政支出を訴えた。その際、余剰物資の処理が、価格暴落の防止、政府の財政的負担の軽減に役立つことを力説した。Wilson Papers, Series VIII—A, Box 8.

さて、大統領の命をうけて、ハウスとフーヴァーを中心に、マコーミック、アウキンクロスらは、案の具体化にとりかかる。まず委員会を統率すべき「廉潔と手腕において国際的声望のある中立国人」として選ばれたのは、ノルウェーのナンセン Nansen, Fridtjof 博士であった。ついでフーヴァーの手で、救済委員会のロシア派遣を提唱してナンセンから連合国元首に送られるべき書翰が作成され、ハウスとアウキンクロスの検討をうける。⁽¹⁾それは、委員会が、「純粹に人道的理由」から組織されるものであることと、ソヴェエトの政治的承認とは全く無関係であることとを強調していた。書翰は、四月三日、ナンセンから四人会議を構成する元首にあて送られた。⁽²⁾

ナンセンの書翰に対する返信は、ハウスによって、彼の下で功名心に燃えて互に鎬を削る、三人の若い代表部員、すなわち、ブリット、アウキンクロス、シラー Miller, David H. に、その作成が命ぜられる。ブリットはこの機会を利用して、以前のブランの復活を企図する。その起草した返信は、ナンセン案への賛意をつけるとともに、ブリッ

トとレーニンとの間に了解を見た諸点を、連合国政府は基本的に承認する趣旨を盛り入れたものであった。⁽³⁾しかし、大統領の態度にかんがみて、このような文面がその承認をうる可能性は全く存在していなかった。

一方、アウキンクロス、ミラーの両人は共同して、別の返信を用意する。それは、ナンセン案への同意を告げると同時に、食糧配給の必要上、ロシアの輸送機関は委員会の管理下におかれること、またロシアの戦線におけるロシア軍隊の戦闘行為を一切中止すること、を条件として提示するものであった。⁽⁴⁾このような、ロシア軍隊の戦闘行為の中止を要求する一方、連合国軍、ポーランド軍、フィンランド軍、その他の戦闘行為の中止には触れない、不公平な休戦提案をソヴェト政府が受諾するとは決して考えられなかった。この点を指摘して、ブリットはアウキンクロス、ミラー原案に強く反対し、⁽⁵⁾修正意見を提示した。主要な修正点は二つで、第一に、「配給の問題は、ロシア国民自身の管理下のみおかれるべきもの」とされた。第二に、「旧ロシア帝国の領土内でのあらゆる戦闘行為の中止」、「これら領土に向けられた、またそこから出発する軍隊、及び一切の軍需物資の移動の中止」が、明らかにうたわれた。⁽⁶⁾結局このブリット修正案が、四月六日、ウイルソンの病床をかこんで開催された全権委員会議で、ナンセン書翰に対するアメリカ政府の返信原案として可決される。⁽⁷⁾

アメリカ原案の線に沿って、連合国政府の同意を獲得すべき工作は、ハウスとフリーヴァの手で進められる。⁽⁸⁾フランス政府の示した難色は、アメリカ政府がポリシェヴィキと直接取引を行わない旨の言質をあたえることで克服された。⁽⁹⁾四月一七日、四国元首の署名をもって、ナンセン宛に、ナンセン委員会の構想に賛意をあたえた返書が發送される。⁽¹⁰⁾かくてここでは舞台の脚本も演出も、一切がアメリカ代表部の手になるものであった。

- (1) Auchincloss Papers, Diary, March 31, 1919.
- (2) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, p. 102.
- (3) Ibid., pp. 104—106.
- (4) Ibid., pp. 103—104.
- (5) 四月四日「ブリットからアウキンクロス宛」電書。Bullitt Papers, No. 25.
- (6) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 106—107. アウキンクロスは「当然このやうな修正に不満であった。『ブリット』の行った変更は『モーラン』軍団（フランスで編成された一筆者）をモーランドに送ることを不可能にした」と、彼はその不満を吐露した。Auchincloss Papers, Diary, April 6, 1919
- (7) ランシングは「アウキンクロス・シラー案を却け」ブリット案をやる。Lansing Papers, Desk Diary, April 5, 6, 1919.
- (8) 四月六日、ハウスは「オルランド伊首相とイギリスのセシル Cecil, Sir Robert 外務次官から」ナンセン委員会構想について同意を獲得する。House Papers, Diary, April 6, 1919. ちうして四月一四日「ハウスはクレマンソーからもその同意を獲得した。Ibid., April 14, 1919. 一方「この問題について準備委員会が」フーズマ「セシル」クレマンテール（仏）Clemencelet「クレマンユ（伊）Crespi の問ひ組織をやる。Wilson Papers, Series VIII—A, Box 34. フローグマンのマネー Monet を通じて」フランス側への表面工作をこころした。McCormick Papers, Diary, April 14, 1919.
- (9) フーズマの「ロビン」仏外相に対する言明。Auchincloss Papers, Diary, April 16, 1919.
- (10) U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 108—109.

ナンセン委員会の派遣の申出でをモスコワは拒否する。ナンセンに対する五月一四日の回答で「チチェリン外務人民委員は、純粹に人道的性質をもった食糧、物資の供給であれば、嬉んでこれを受ける用意がある。ところが、ナン

セン元来の意図——四月三日の連合国元首宛の書翰が示しているような——は、歪められ、戦闘行為の中止、軍隊、軍需物資の移動停止といった政治目的の遂行が、委員会の使命の中に混入してきている。「われわれと……連合国との関係にかんするすべての問題が審議される場合にのみ、われわれは戦闘行為の中止を討議する立場にある。……人道的事業の仮面の下に、われわれの存在の根本的問題につらなるような譲歩をすることはできない」と、回答はその立場を明らかにした。⁽¹⁾

ナンセン委員案は、ソヴィエト政府によって拒否された。この時期にはしかし、コルチャク軍の進撃についての情報が、確実なものとしてバりに受けとられはじめるとともに、アメリカ全権委員団内部においては、ナンセン案の発案者の中においてすら、その政策に対する懐疑的態度が生れはじめる。マコーミックの日記は、コルチャク軍前進についての情報に比例して、変化してゆく彼の態度をよく示している。四月二四日、「コルチャク政府とともに事態は急速に動いており、むしろナンセン書翰のモスコへの伝達を遅らす方が望ましい。」五月二日「コルチャクのすばらしい前進にかんがみて、ナンセン救済委員会の派遣は、間違いだと思われるようになってきた。」そして五月七日、ナンセンと会見して、まだメッセージのモスコに伝達されていないことを知ったマコーミックは、ナンセンに対し「戦闘中止の条件をつけることなく、たんにペトログラードに救済物資を提供するという形の新しい申出で」をするよう、提案した。⁽²⁾ ウラルにおける戦況の発展により、休戦協定をむしろ有害なものと考えはじめた彼の態度の変化を示すものである。またナンセン案に対する、反革命派の代表の反対運動もはげしかった。⁽³⁾ この状況に、ブリットは五月六日、スウェーデンのモリス Morris, I. N. 米公使に手紙をしたためている。

「ナンセン案の運命は依然宙にかかっている。というのは、この政策が決定されるや否や、コルチャクが、僅か前進した。するとたちまち、すべての干渉主義者はふたたび元気をとり戻した。ソヴィエト政府の没落近きを信じて、ふたたびあらゆる手段を講じて、ナンセン案の阻止を試みて⁽⁴⁾いる。」

かくして、ナンセン委員会案に対するソヴィエト政府の否定的回答と、コルチャク軍をめぐる戦局の展開とにより、平和会議においてアメリカ政府がこころみた、一連のソヴィエト政府への接近行動に終止符が打たれることとなる。そしてアメリカの新政策を推進すべく擡頭してくるのが、国務省が代表する「干渉主義勢力」であり、その政策は、コルチャク政権の承認、反革命派に対する物的援助の強化をその目標とした⁽⁵⁾。パリの連合国指導者の政策も転回をはじめ、五月二六日の、四国元首によるコルチャクへの通告として、決定的な形態をとる。

「過去一二ヶ月の経験にかんがみて、モスコーのソヴィエト政府との取引きによっては、ロシア国内の平和を回復するという目的を達成することが不可能であることを確信した。それゆえ、コルチャク政権、及びその協力者の政策が、連合国のそれと同様の目的を追求しているとの明確な保証があたえられることを条件に、連合国政府は、コルチャク政権、及びその協力者が、全ロシアの政府として確立するよう、これに軍需物資、食糧その他の必需品を供給する用意がある……⁽⁶⁾」

(1) U. S. Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 111—115.

(2) McCormick Papers, Diary, April 24, May 2, 7, 1919.

(3) U. S. Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 109—110.

(4) Bullitt Papers, No. 26.

(5) すでに見たように、國務省は、ポリシェヴィキに対する休戦提案に反対の意向をもっていた(たとえば、一月六日、國務省覚書)。さらに國務省は、コルチャク政権承認問題についても、その検討の要をバリ宛に具申するが(たとえば、二月一日、ポークからランシング)、四月一日には、マイルズ Miles, Basil ロシア部長は、「オムスク政府を即刻承認するよう勧告する」覚書を、ポーク國務長官代理に提出する。Department of State Papers National Archives, 861. 77791-¹/₂。五月六日、ポークはバリに、「オムスク政府に「事実上の承認」を与えるべきことを打電してきた。U. S., Foreign Relations, 1919, Russia, pp. 339—341.

(6) Ibid., pp. 367—370.

六 む す び

以上の分析が示すごとく、パリ会議で、連合国の政府指導者が《ロシア問題》の処理にあたってとった基本的観点は、ポリシェヴィズムの脅威からいかにしてヨーロッパを守るかということにあった。その方法として、積極的な武力干渉から「封じこめ」にいたる政策が考慮された。

《ロシア問題》の解決策として、アメリカ政府内でも見解の対立が見られた。しかし、パリ会議の期間中、アメリカの政府指導者がとった、ソヴィエト政府に対する接近行動は、最大の外交目標として、ソヴィエト政府をして、ポリシェヴィズムの拡大運動を停止せしめることを追求した。いわば協定を通じて「封じこめ」を実現しようとするものであった。バクラー・リトヴィノフ交渉からナンセン委員会の提案にいたる、アメリカ政府のソヴィエト政府に

対する外交的工作は、一貫してこの目標を追求していたといえる。

ところで、ボリシェヴィズムの「封じこめ」は、ソヴィエト政権の変質化への期待と結びついていた。それは政権の内部崩壊（フリーヴァー）、あるいは穩健化、《民主化》（ブリット、バクラー）、といった、異なる運動方向を描いていたにしろ、いずれも、連合国政府と協調しうる性質の政権がロシアで出現することを望むものであった。

コルチャク軍の進撃の成功は、アメリカ政府指導者をして、協定による「封じこめ」構想の放棄から、コルチャク、その他反革命軍の援助強化へと政策を転換せしめ、彼らの武力による、ソヴィエト政府の崩壊を期待せしめることとなる。かくしてアメリカ、ソヴィエト両国間の外交史の初期の段階に訪れた、和解と協定の機会は失われ、両国の正式の国交開始は、一九三三年の秋まで待たねばならぬこととなる。そして一九一九年当時、レーニン政権との協定成立に奔走したブリットは、やがて初代駐ソ大使として、スターリン治下のモスコーに乗込むこととなる。

なお本稿は、シベリアにおける連合国の対ソ武力干渉史（一九一八—一九二二）の研究過程において、興味ある副産物として生れたものであったことを附記しておきたい。